令和元年度

市原市内遺跡発掘調査報告

上椎木遺跡（第4地点）

瀬又小滝遺跡（第2地点）

大宮神社浅間塚

南大広遺跡（C地区）

稲荷台遺跡（O地点）

２０２０

市 原 市 教 育 委 員 会

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第49集

令和元年度

市原市内遺跡発掘調査報告

かみしいのぎ
上椎木遺跡（第４地点）

せまたこだき
瀬又小滝遺跡（第２地点）

おおみやじんじゃせんげんづか
大宮神社浅間塚

みなみおおひろ
南大広遺跡（C地区）

いなりだい
稲荷台遺跡（O地点）

２０２０

市 原 市 教 育 委 員 会

例　　言

1　本書は、国庫及び県費の補助を受けて、市原市教育委員会が主体となり実施した、市内に所在する遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査及び整理作業・報告書刊行は、市原市教育委員会生涯学習部ふるさと文化課埋蔵文化財調査センターが実施した。

3　本書所収の調査は以下のとおりである。所在地等の諸情報は巻末の報告書抄録に記載した。

（1）上椎木遺跡（第４地点）（調査コード セ568）

確認調査69㎡／686.40㎡　本調査208.9㎡

調査期間：平成31年1月7日～１月15日（確認調査）　担当　櫻井敦史・中野喬介

調査期間：平成31年1月16日～2月4日（本調査）　担当　小川浩一・中野喬介

（2）瀬又小滝遺跡（第２地点）（調査コード セ569）

確認調査19㎡／191㎡　本調査46.4㎡

調査期間：平成31年2月1日～2月5日（確認調査）　担当　中野喬介

調査期間：平成31年2月6日～2月13日（本調査）　担当　中野喬介

（3）大宮神社浅間塚（調査コード セ570）

確認調査20㎡／197.383㎡

調査期間：平成31年4月15日～令和元年5月16日　担当　浅野健太・中野喬介

（4）南大広遺跡（C地区）（調査コード セ571）

確認調査889㎡／8,890㎡

調査期間：令和元年5月7日～５月30日　担当　小川浩一

（5）稲荷台遺跡（O地点）（調査コード セ574）

確認調査107㎡／1,070㎡

調査期間：令和元年9月10日～９月27日　担当　小川浩一

4　整理作業・本文執筆は（１）・（2）を中野、（3）を浅野、（4）・（5）を小川が行い、編集は小川が担当した。

5　各遺跡の調査に際し、基準点測量を実施したのは稲荷台遺跡（O地点）のみである。これ以外の遺跡の図中に示した座標値及び北方位は、周辺道路上にある基準点や、地形図から求めたもので、厳密なものではない。また、水準は遺跡近隣の市原市管理の既知点から求めて使用している。

6　上椎木遺跡及び瀬又小滝遺跡は、前年度の調査であるが年度末であったため、今年度の整理・報告とした。また、今年度は稲荷台遺跡（P地点）（調査コード セ576）と郡本遺跡群（第25次）（調査コード セ577）、稲荷台遺跡（Q地点）（調査コード セ579）の調査も実施したが、整理期間がとれないため次年度の報告とする。

7　遺物写真（図版7～9）の縮尺は基本的に実測図に準じる。

本 文 目 次

1　調査遺跡の位置と概要 …… 1
2　上椎木遺跡（第 4 地点） …… 3
3　瀬又小滝遺跡（第 2 地点） …… 13
4　大宮神社浅間塚 …… 16
5　南大広遺跡（C 地区） …… 20
6　稲荷台遺跡（O 地点） …… 22

挿 図 目 次

第 1 図　調査遺跡位置図 …… 2
第 2 図　上椎木遺跡（第 4 地点）周辺地形図 …… 4
第 3 図　上椎木遺跡（第 4 地点）平面図 …… 5
第 4 図　上椎木遺跡（第 4 地点）断面図（1） …… 6
第 5 図　上椎木遺跡（第 4 地点）断面図（2） …… 7
第 6 図　上椎木遺跡（第 4 地点）断面図（3） …… 8
第 7 図　上椎木遺跡（第 4 地点）断面図（4） …… 9
第 8 図　上椎木遺跡（第 4 地点）出土遺物 実測図（1） …… 10
第 9 図　上椎木遺跡（第 4 地点）出土遺物 実測図（2） …… 11
第 10 図　上椎木遺跡（第 4 地点）出土遺物 実測図（3） …… 12
第 11 図　瀬又小滝遺跡（第 2 地点）周辺地形図・平面図 …… 14
第 12 図　瀬又小滝遺跡（第 2 地点）断面図・出土遺物 実測図 …… 15
第 13 図　大宮神社浅間塚 周辺地形図 …… 16
第 14 図　大宮神社浅間塚 平面図・断面図（1） …… 18
第 15 図　大宮神社浅間塚 断面図（2）・出土遺物 実測図 …… 19
第 16 図　南大広遺跡（C 地区）周辺地形図 …… 20
第 17 図　南大広遺跡（C 地区）平面図・断面図 …… 21
第 18 図　稲荷台遺跡（O 地点）周辺地形図 …… 23
第 19 図　稲荷台遺跡（O 地点）平面図・出土遺物 実測図 …… 24

表 目 次

出土遺物観察表 …… 25

図 版 目 次

図版 1　遺構　上椎木遺跡（第 4 地点）
図版 2　遺構　瀬又小滝遺跡（第 2 地点）
図版 3　遺構　大宮神社浅間塚
図版 4　遺構　大宮神社浅間塚
図版 5　遺構　南大広遺跡（C 地区）
図版 6　遺構　稲荷台遺跡（O 地点）
図版 7　遺物　大宮神社浅間塚／上椎木遺跡（第 4 地点）
図版 8　遺物　上椎木遺跡（第 4 地点）
図版 9　遺物　上椎木遺跡（第 4 地点）／瀬又小滝遺跡（第 2 地点）／大宮神社浅間塚／稲荷台遺跡（O 地点）

1　調査遺跡の位置と概要

令和元年度は、大宮神社浅間塚、南大広遺跡（C地区）、稲荷台遺跡（O地点）、稲荷台遺跡（P地点）、郡本遺跡群（第25次）、稲荷台遺跡（Q地点）の6か所の発掘調査を行った。調査遺跡はいずれも市の北部に位置し（第1図）、調査原因は塚の移設が1か所、宅地造成が3か所、保育所建設が1か所、個人住宅建設が1か所である。

本書では平成30年度終盤に調査を行った上椎木遺跡（第4地点）、瀬又小滝遺跡（第2地点）を今年度の整理報告対象に含め、本年度発掘調査を行った3遺跡に加えて掲載した。

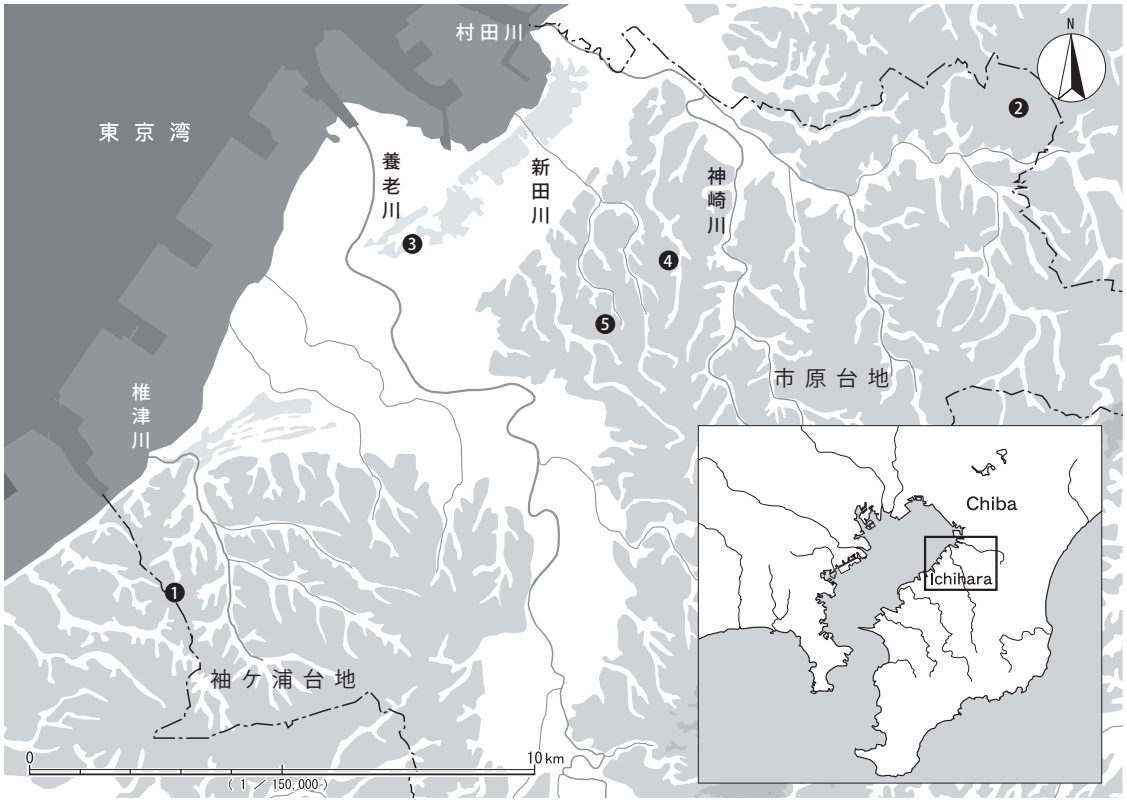
上椎木遺跡（第4地点）は、椎津川と久保田川に挟まれた標高54ｍ程度の台地上に位置する。袖ケ浦市との境界付近にあり、隣接する県道において調査が行われており、縄文時代早期後半の炉穴群が検出されている（宮本1985・1986）。調査の結果、ほぼ同様の遺構が検出され、周辺一帯に早期の炉穴群が広がっていることが確認された。

瀬又小滝遺跡（第2地点）は、村田川本流の上流域、一小谷を望む台地の縁辺部、標高67ｍ程度の台地上に位置する。今回の調査において、縄文時代の土坑を確認した。周辺では、西方約200ｍにおいて調査が行われており、縄文時代早期後半の竪穴状遺構及び土坑が検出され、田戸上層式土器が出土している（田中2000）。他には調査遺跡がなく、当地域における貴重な調査事例となった。

大宮神社浅間塚は、養老川河口部右岸にあり、海岸平野上に所在する標高2.8ｍ前後の微高地上に位置する。富士塚の移設に伴い、発掘調査を行った結果、塚の墳丘構築土内に近代磁器を確認し、富士塚の築造年代が明治時代以降であることが明らかになった。この付近では、周囲に発掘調査事例がほとんどなく、地域の身近な歴史を示すこととなった。

南大広遺跡（C地区）は、市原台地中央部を流れる新田川支流によって開析された、標高34～35ｍ前後の台地東側縁辺部に位置する。新田川との比高差は約20ｍあり、当調査区の北西から南東にかけて小支谷の進入がある。周囲は、西方100ｍの位置で調査事例があり、2棟の竪穴建物跡及び製鉄址1基が検出されている。製鉄址では「寺」と書かれた墨書土器や、釘、フイゴの羽口及び瓦が出土している。また、南西100ｍでは、能満南大広遺跡（B地区）として調査が行われており、奈良・平安時代の竪穴建物跡5棟、溝2条、掘立柱建物跡2棟、方形基壇1基、小鍛冶跡1基などが検出された。出土遺物は、布目瓦、緑釉小瓶片、鉄滓、須恵器、土師器などであり、方形基壇の中央からは蕨手大刀、南西及び南東隅には刀子が埋納された状態で出土しており、鎮壇遺構と考えられている。先述の遺跡から出土した「寺」と書かれた墨書土器や、B地区で検出された方形基壇から、一帯が寺院跡とされており、当該期を中心とする遺構の広がりが予想された。

稲荷台遺跡（O地点）は、西に東京湾を望む市原台地にあり、白幡川水系によって開析された標高26ｍ程度の台地西側縁辺部に位置する。当調査区の北は小支谷が西側から入り込んでおり、「在長面」という小字を有し、地名からも古代官衙関連の遺跡の存在を想定させる地域となっている。稲荷台遺跡は、狭小な面積が主ではあるが、これまで数地点において発掘調査が行われてきており、その中核的区域とみられる南方約250ｍに位置するE地区では、四面廂を持つ掘立柱建物跡を含む多数の掘立柱建物跡や、犠牲獣を伴う祭祀跡を検出すると共に、大量の緑釉陶器が出土しており、集落遺跡とは様相の異なる国府関連遺跡と考えられている。北側に位置する当調査地点へのそれら国府



❶ 上椎木遺跡（第4地点）
❷ 瀬又小滝遺跡（第2地点）
❸ 大宮神社浅間塚
❹ 南大広遺跡（C地区）
❺ 稲荷台遺跡（O地点）

第1図　調査遺跡位置図

関連遺構の分布を把握することが期待された。

引用参考文献

浅野健太2020『南大広遺跡（C地区）』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第48集

浅利幸一他2003『市原市稲荷台遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告書Ⅸ　財団法人市原市文化財センター

田中清美1995「能満南大広遺跡（B地区）」『市原市文化財センター年報（平成3年度）』財団法人市原市文化財センター

田中清美2000「瀬又小滝遺跡」『市原市文化財センター年報（平成9年度）』財団法人市原市文化財センター

中村恵次・市毛　勲1968「南大広遺跡・海保古墳群」『市原市埋蔵文化財調査報告4』千葉県市原市教育委員会

牧野光隆2003「稲荷台遺跡」『平成14年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会

宮本敬一1985「椎津中林遺跡」『市原市文化財センター年報（昭和59年度）』財団法人市原市文化財センター

宮本敬一1986「椎津中林遺跡」『市原市文化財センター年報（昭和60年度）』財団法人市原市文化財センター

2　上椎木遺跡（第４地点）

遺跡の位置　上椎木遺跡は、茨城県南部から千葉県北西部に広がる、通称下総台地の南端にあたり、東京湾に注ぐ２級河川である養老川と小櫃川に挟まれた袖ケ浦台地上に位置する（第１図）。この台地は小河川により開析された標高50～54ｍ程の洪積台地であり、小谷が複雑に入り込む樹枝状の地形を呈している。今回の調査区は、市原市域では北西部にあたり、市原市と袖ケ浦市を区画する県道に隣接する。調査区の標高は54ｍに満たない程度であり、道路部分より約0.8ｍ高い。周辺の調査事例としては、今回調査区に隣接する県道で実施された調査（宮本1985・1986）において、縄文時代早期後半の炉穴群および中・近世の道路跡が確認されている。なお、この昭和59・60年度調査区は椎津中林遺跡として報告したが、一部の調査区を除いては上椎木遺跡内にあたり、ＢⅠ・ＢⅡ・ＢⅢ地区は、それぞれ上椎木遺跡第１・第２・第３地点、今回の調査区は第４地点となる。また、当調査区から南東へ約200ｍの地点、椎津新林遺跡においても縄文時代の土坑９基の他、古代から中世にかけての道路跡が発見されている（北見2003）。

上椎木遺跡は袖ケ浦市にまたがり、袖ケ浦市側では、清水川台遺跡という名称が用いられている。財団法人君津郡市文化財センターによる発掘では、旧石器時代の細石刃核・剥片・礫などの石器類が発見された他、奈良時代の竪穴建物跡10棟が確認され、この建物群のうち８棟からかなりの量の鉄滓が出土していることから、製鉄に関わる集落と評価されている（佐久間他1983）。なお、この調査においては、縄文時代の遺構こそ検出されなかったものの、遺構に伴わない形で早期前葉から前期の縄文土器が出土している。また、調査区から南方約400ｍ地点、豆作台遺跡内における調査でも、早期の土坑の他、早期条痕文期から前期の竪穴建物跡などが検出されており、縄文時代早期から前期に属する周辺遺跡の数および調査例は多い。

調査概要　今回は個人住宅の建設に伴う調査であり、現場状況に応じながらも調査区に対し均等になるよう、11本のトレンチを設定し確認調査を実施した。調査区内では以前造園業を営んでいたため、植物の根による撹乱が多大である。また、試掘において縄文時代早期の土器が出土していることに加え、上述の通り周辺の調査事例でも早期の遺構・遺物が検出されていたため、調査に際しては炉穴や土坑と撹乱の混在に注意し掘削を進めた。その結果、精査を実施した全てのトレンチから、縄文時代早期の遺構が検出され、当該地の遺構・遺物の分布が密であることが明白となった。

この確認調査の結果を受け、連続して本調査を実施する運びとなり２・３・６・８～11トレンチ（第３図）を埋め戻した後、浄化槽埋設が予定される１トレンチ並びに、個人住宅の建設予定範囲内に設定した４・５・７トレンチを拡張し、対象範囲686.4㎡のうち合計208.9㎡を対象に本調査を実施した。その結果、本調査範囲からは、縄文時代早期炉穴が14基、縄文時代早期土坑２基が検出された。

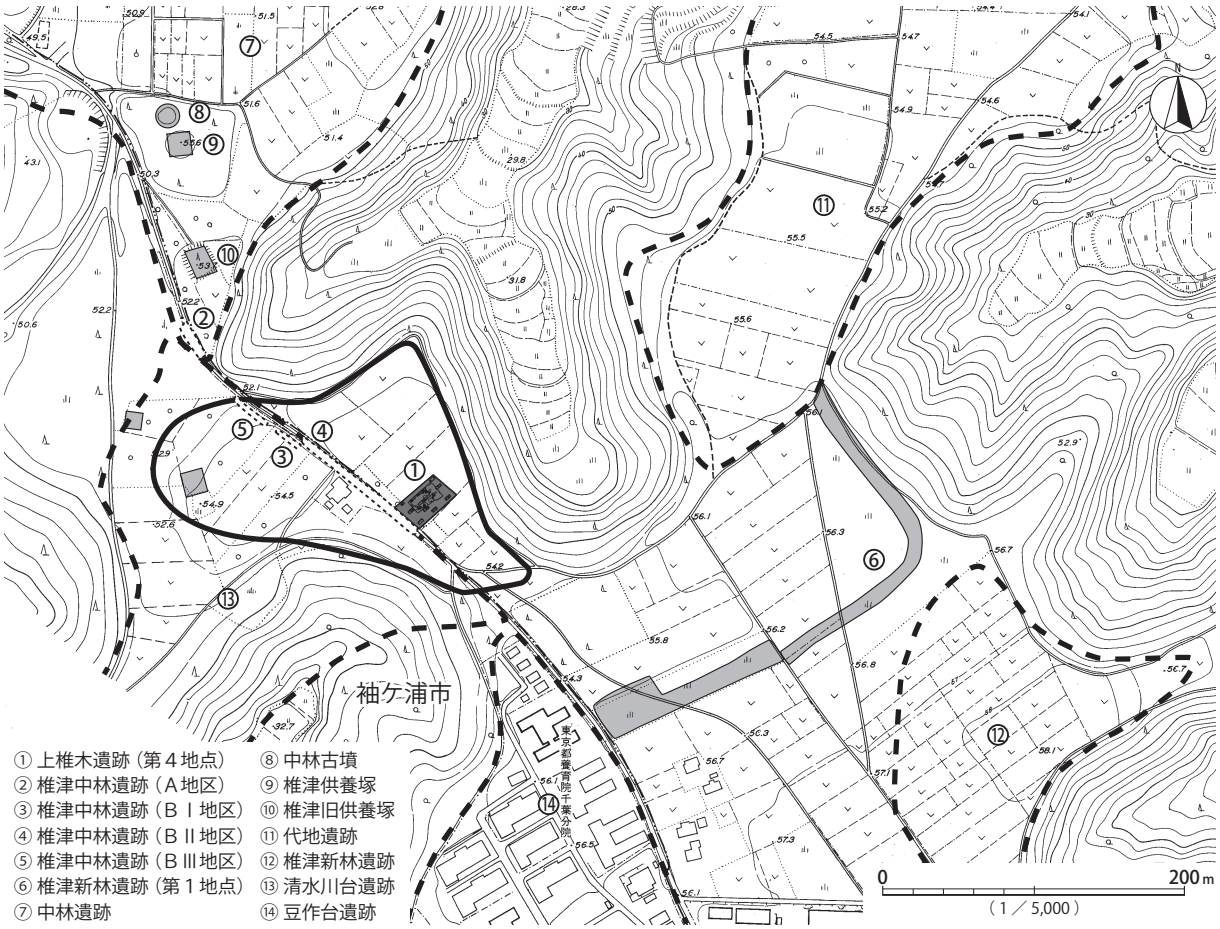
遺構と遺物　確認調査において、１トレンチからは縄文時代早期の炉穴（032号）が１基確認された。図示できる遺物として無文土器と敲石（第10図36・37）が検出されている。２トレンチからは同時期の炉穴が２基（014・017号）、土坑２基（015・016号）が検出され、表面を精査した際、014号から早期土器２点（第10図38・39）が出土している。３トレンチからはピット３基が確認され、そのうち006号ピットからは早期の土器片が確認されているが、図示できるものは僅かである。４・５・７トレンチは住宅建設工事範囲に該当しており、後述の遺構・遺物を確認したため、本調査へと移行した。

6トレンチは、試掘トレンチを拡張する形で設定したもので土坑1基（009号）が検出され、石鏃（第10図46）などが出土した。8トレンチからは土坑3基、9トレンチからは土坑2基、10トレンチからは土坑3基が確認されたものの、遺構の時期を示す遺物はほとんど確認されていない。11トレンチに関しては大型の土坑003号が検出され、遺物も多く出土している（第10図53～57）。

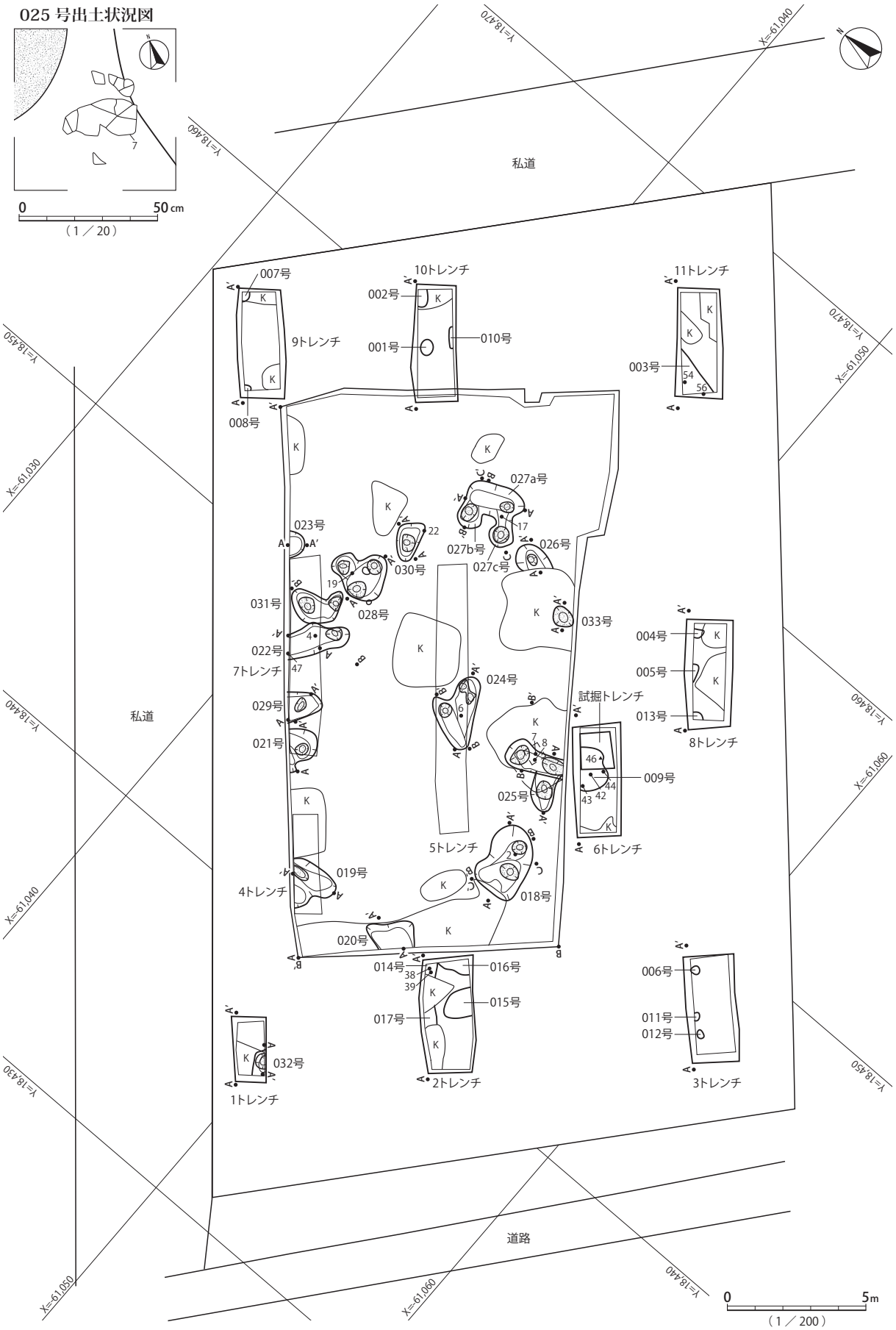
続いて行われた本調査では、住宅建設範囲を対象に確認調査の結果明らかになった遺物確認面まで掘削を進めた（第3図）。本調査範囲からは018号から033号までの遺構が検出された。020・023号土坑2基を除けば全て燃焼面を有する炉穴であり、形は円形や楕円形、長楕円形など様々である。掘方を共有し、いわゆるアメーバ状に展開しているため、031号のように遺構の状態からは新旧関係を読み取れない場合もある。燃焼面が明確なため、033号のように深く撹乱を受けたものであっても捕捉することができた。

今回の調査では遺構外からの遺物の出土も多いが（第9図26～35）、その多くはこのような遺構と切りあう撹乱内から出土している。

遺物は早期の土器が占め、特に子母口式の土器が多い。状態はどれも悪く、小片の割合が多いが、025号遺構においては全体の3分1近くを残す子母口式の尖底土器（第8図7）が出土している。025号、あるいは026号の燃焼面の上部から出土したため、子母口式期よりも遡る土地の利用が推定される。実際に遺構外の出土であるものの、三戸式土器（第9図33）が調査範囲内にて検出されている。

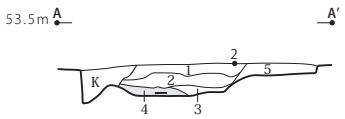


第2図　上椎木遺跡（第4地点）周辺地形図

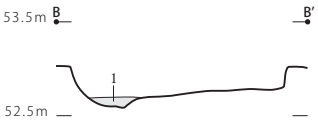


第3図　上椎木遺跡（第4地点）平面図

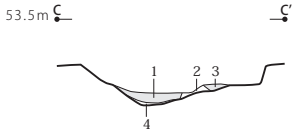
018 号



1　7.5YR3/1 黒褐色土　粘性なし　しまり弱い　一部植物の根による撹乱を受ける
2　7.5YR3/2 黒褐色土　粘性なし　しまりややあり　径 2 ～ 10 ㎜の 7.5YR6/8 橙色粒子を多量含む
3　10YR3/4 暗褐色土　粘性ややあり　しまり強い　10YR4/6 褐色のロームがまだらに混じる
　径 2 ～ 4 ㎜の橙色粒子を多く含む
4　5YR4/4 にぶい赤褐色土　粘性ややあり　しまり強い　径 2 ～ 5 ㎜の 5YR6/8 橙色粒子を極めて多く含む
　炉床
5　10YR3/4 暗褐色土　粘性ややあり　しまりなし　植物の根による撹乱を受ける

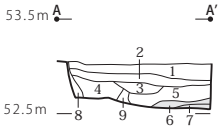


1　2.5YR4/6 赤褐色土　粘性なし　しまりあり　直下の炉の覆土は 5YR3/6 暗赤褐色
　被熱によりローム固まる



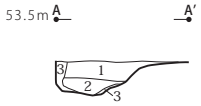
1　2.5YR4/8 赤褐色土　粘性なし　しまり強い　一部 7.5YR3/2 黒褐色の土がブロック状に混じる
2　7.5YR4/3 褐色土　粘性なし　しまりあり　1 層と 3 層のローム層を隔てる　一部に径 2 ～ 4 ㎜の 2.5YR4/8 赤褐色の粒子が混じる
3　2.5YR4/6 赤褐色土　粘性なし　しまり強い　1 層とは別の炉　下方の一部に 2 層のロームが混じる
4　2.5YR3/6 暗赤褐色土　粘性なし　しまり強い　被熱により硬化する

019 号



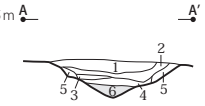
1　7.5YR3/4 暗褐色土　粘性なし　しまりなし　径 1 ～ 8 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子を少量含む
2　7.5YR3/3 暗褐色土　粘性ややあり　しまりなし　径 2 ～ 6 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子を少量（1 層よりは多い）含む
3　7.5YR3/3 暗褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　径 2 ～ 8 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子を 2 層より多く含む　径 3 ～ 8 ㎜の 7.5YR6/6 橙色ローム粒を多く含む
4　7.5YR2/3 極暗褐色土　粘性あり　しまり強い　径 2 ～ 10 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子を多量含む　径 2 ～ 6 ㎜の 7.5YR6/6 橙色ローム粒を多く含む
　下部に炭化物あり
5　7.5YR3/2 黒褐色土　粘性ややあり　しまり強い　径 2 ～ 10 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子を多量含む　径 50 ～ 60 ㎜の 7.5YR6/6 橙色ロームブロックが混じる
6　7.5YR3/3 暗褐色土　粘性なし　しまり強い　径 1 ～ 20 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子を極めて多く含む
7　5YR5/8 明赤褐色土　粘性なし　しまり強い　被熱により径 20 ～ 30 ㎜の粒に固まる　直下に被熱により硬化した 7.5YR4/3 褐色のローム層あり
8　7.5YR4/3 褐色土　粘性あり　しまり強い　下部に径 40 ㎜前後の 7.5YR3/2 黒褐色土のブロックが混じる
9　7.5YR4/3 褐色土　粘性あり　やや弱い　径 40 ㎜前後の 7.5YR3/2 黒褐色土のブロックが 8 層より多く混じる

020 号



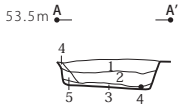
1　7.5YR3/2 黒褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　径 2 ～ 6 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子
　径 4 ～ 6 ㎜の 7.5YR5/8 明褐色のローム粒を多く含む
2　7.5YR3/3 暗褐色土　粘性あり　しまりややあり　径 4 ～ 6 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子
　径 2 ～ 8 ㎜の 7.5YR5/8 明褐色のローム粒を多く含む
3　7.5YR4/4 褐色土　粘性ややあり　しまりあり

021 号



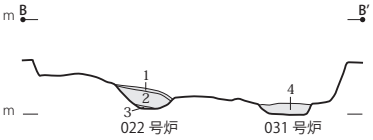
1　7.5YR3/4 暗褐色土　粘性なし　しまりなし　木の根による撹乱を受ける
2　5YR4/4 にぶい赤褐色土　粘性ややあり　しまりなし
3　5YR4/3 にぶい赤褐色土　粘性なし　しまりなし　径 2 ～ 4 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子が
　多く混じる
4　2.5YR4/6 赤褐色土　粘性なし　しまり強い　径 2 ～ 10 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子が非常に
　多く混じる
5　7.5YR4/3 褐色土　粘性あり　しまりあり　（ソフトローム・地山）
6　5YR4/4 にぶい赤褐色土　粘性なし　しまりややあり　被熱により小礫状に土が固まる
　直下に被熱しひび割れた 5YR6/6 橙色のローム層（炉床）あり

022 号



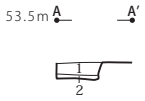
1　7.5YR3/4 暗褐色土　粘性なし　しまりなし　径 2 ～ 3 ㎜の 5YR5/8 明赤褐色粒子を含む
2　7.5YR2/3 極暗褐色土　粘性ややあり　しまりあり　径 2 ～ 7 ㎜の 5YR5/8 明赤褐色粒子を含む
3　7.5YR4/4 褐色土　粘性あり　しまりややあり　一部に 7.5YR3/3 暗褐色土が混じる
4　7.5YR3/4 暗褐色土　粘性あり　しまりなし　木の根の撹乱を受ける
5　7.5YR4/4 褐色土　粘性なし　しまりややあり　径 1 ㎜前後の 7.5YR6/8 橙色粒子を
　ごくわずかに含む

022・031 号



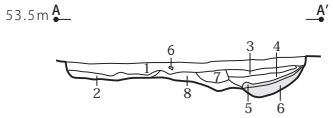
1　5YR3/6 暗赤褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　一部木の根による撹乱を受ける
　（022 号炉覆土）
2　2.5YR5/8 明赤褐色土　粘性なし　しまりややあり　一部に径 2 ～ 4 ㎜の小粒が混じる
　（022 号炉覆土）
3　5YR5/8 明赤褐色土　粘性なし　しまりなし　被熱によりローム層が固まり、ひび割れる
　（022 号炉覆土）
4　2.5YR4/6 赤褐色土　粘性ややあり　しまりなし
　径 2 ～ 4 ㎜の 2.5YR5/6 明赤褐色粒子を多量含む　粒子は下部ほど多くなる　（031 号炉覆土）

023 号



1　7.5YR4/4 褐色土　粘性なし　しまりややあり　木の根による撹乱を受ける
2　7.5YR4/6 褐色土　粘性ややあり　しまりあり

024 号



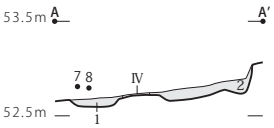
1　5YR3/2 暗赤褐色土　粘性なし　しまりなし　木の根による撹乱を受ける
2　5YR3/3 暗赤褐色土　粘性ややあり　しまり強い　径 3 ㎜前後の 5YR6/8 橙色粒子をごくわずかに含む
3　5YR3/3 暗赤褐色土　粘性ややあり　しまりなし　径 1 ～ 3 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子をわずかに含む
4　5YR3/4 暗赤褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　径 1 ～ 10 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子を多く含む
5　5YR4/3 にぶい赤褐色土　粘性なし　しまりなし　径 1 ～ 10 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子をきわめて多く含む
6　2.5YR4/6 赤褐色土　粘性なし　しまり強い　被熱のため、径 20 ～ 40 ㎜の粒状に固まる　直下に炉床の硬化面あり
　被熱により硬化しひび割れた 5YR4/8 赤褐色のロームあり
7　7.5YR3/4 暗褐色土　粘性なし　しまりややあり　木の根による撹乱を受け、7.5YR4/3 褐色の土がまだらに混じる
8　7.5YR4/6 褐色土　粘性ややあり　しまりややあり

1　5YR4/4 にぶい赤褐色土　粘性なし　しまりあり　径 2 ～ 5 ㎜の 7.5YR6/8 橙色スコリアを多量含む
2　2.5YR4/3 にぶい赤褐色土　粘性なし　しまり強い　径 5 ～ 10 ㎜の 2.5YR6/6 の焼土粒が非常に多く混じる

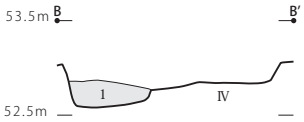
0　2m
（1 ／ 80）

第4図　上椎木遺跡（第4地点）断面図（1）

025 号

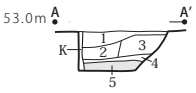


1　5YR5/8 明赤褐色土　粘性なし　しまりややあり　被熱によりローム層が固まりひび割れる
2　5YR5/8 明赤褐色土　粘性なし　しまりややあり　被熱によりローム層が固まりひび割れる



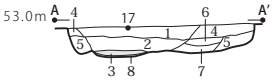
1　2.5YR5/8 明赤褐色土　粘性なし　しまりややあり　下部被熱によりローム層固まる

026 号



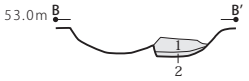
1　7.5YR3/2 黒褐色土　粘性なし　しまりややあり　径 3 ～ 6 ㎜の 7.5YR6/6 橙色粒子を少量含む
2　7.5YR3/4 暗褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　径 4 ～ 6 ㎜の 7.5YR6/8 橙色粒子を少量含む　径 1 ～ 6 ㎜の 5YR5/8 明赤褐色粒子をわずかに含む
3　5YR3/2 暗赤褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　径 2 ～ 6 ㎜の 7.5YR6/8 橙色粒子を少量含む　径 1 ～ 10 ㎜の 5YR5/8 明赤褐色粒子を多く含む
4　5YR4/6 赤褐色土　粘性なし　しまりなし
5　2.5YR4/8 赤褐色土　粘性なし　しまりややあり　径 3 ～ 5 ㎜の 5YR7/8 橙色粒子を多く含む　下部に 5YR5/8 明赤褐色土、径 2 ～ 4 ㎜の 5YR7/8 橙色粒子を少量含む

027a 号



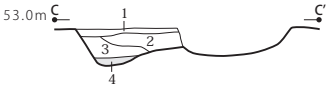
1　7.5YR2/3 極暗褐色土　粘性なし　しまりなし　径 2 ～ 3 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子をわずかに含む
2　7.5YR3/3 暗褐色土　粘性なし　しまりややあり　径 2 ～ 8 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子をまばらに含む
3　7.5YR3/4 暗褐色土　粘性なし　しまり強い　径 2 ～ 10 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子を極めて多く含む
4　7.5YR3/3 暗褐色土　粘性なし　しまりなし　木の根による撹乱を受ける
5　7.5YR4/3 褐色土　粘性ややあり　しまりあり　一部木の根による撹乱を受ける
6　7.5YR3/4 暗褐色土　粘性ややあり　しまりなし　5 層より柔らかい
7　7.5YR3/4 暗褐色土　粘性ややあり　しまりなし　径 10 ～ 20 ㎜の 7.5YR5/6 明褐色ロームブロックが混じる
8　7.5YR3/4 暗褐色土　粘性なし　しまり強い　被熱により硬化したソフトローム層

027b 号



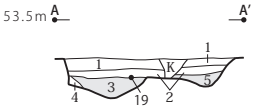
1　5YR4/4 にぶい赤褐色土　粘性なし　しまりあり　粒子非常に細かい
2　5YR4/6 赤褐色土　粘性なし　しまりあり　径 2 ～ 4 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子を多く含む　直下に被熱し硬化した 5YR6/6 橙色のローム層あり

027c 号



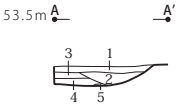
1　5YR4/4 にぶい赤褐色土　粘性なし　しまりややあり　粒子細かい
2　2.5YR3/6 暗赤褐色土　粘性なし　しまりあり　径 2 ～ 3 ㎜の 2.5YR6/8 橙色スコリアを微量含む
3　2.5YR4/4 にぶい赤褐色土　粘性なし　しまりややあり　被熱により下部の一部が径 5 ～ 8 ㎜の小粒状に固まる
4　5YR4/6 赤褐色土　粘性なし　しまりあり　粒子細かい　被熱により径 2 ～ 20 ㎜の小粒状に固まる

028 号



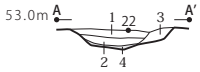
1　7.5YR3/3 暗褐色土　粘性ややあり　しまりなし　木の根による撹乱を受ける
2　7.5YR3/2 黒褐色土　粘性なし　しまりなし　径 4 ～ 9 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子を少量含む
3　5YR3/6 暗赤褐色土　粘性あり　しまりあり　径 2 ～ 10 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子を極めて多く含む
　直下に被熱により硬化し、40 ～ 60 ㎜の小石状に固まる 7.5YR6/6 橙色のローム層（炉床）あり
4　7.5YR4/4 褐色土　粘性ややあり　しまりなし　木の根による撹乱を受ける　7.5YR5/8 明褐色土混じる
5　5YR3/6 暗赤褐色土　粘性あり　しまりあり　径 2 ～ 10 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子を多量含む

029 号



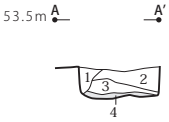
1　7.5YR4/4 褐色土　粘性ややあり　しまりあり　木の根による撹乱を受ける
2　2.5YR4/4 にぶい赤褐色土　粘性なし　しまりなし　粒子細かい
3　7.5YR4/6 褐色土　粘性ややあり　しまりややあり
4　7.5YR5/6 明褐色土　粘性あり　しまりややあり
5　7.5YR5/6 明褐色土　粘性なし　しまりややあり　被熱により硬化し、ひび割れる　（炉床）

030 号



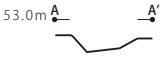
1　7.5YR3/3 暗褐色土　粘性ややあり　しまりなし　木の根による撹乱を受ける
2　5YR4/3 にぶい赤褐色土　粘性ややあり　しまりあり
　径 2 ～ 4 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子を多く含む
3　7.5YR4/4 褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　木の根による撹乱を受ける
4　5YR5/8 明赤褐色土　粘性なし　しまり強い
　被熱により強く固まる　直下に被熱によりひび割れた 5YR5/4 にぶい赤褐色のローム層あり

032 号



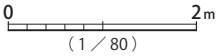
1　7.5YR3/3 暗褐色土　粘性なし　しまりなし　掘削による撹乱を受ける
2　7.5YR2/3 極暗褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　植物の根による撹乱を受ける
3　5YR3/6 暗赤褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　径 1 ～ 2 ㎜の 2.5YR4/6 赤褐色粒子を少量含む
4　2.5YR4/6 赤褐色土　粘性なし　しまり強い　被熱により 10 ～ 30 ㎜の小粒状に固まる　直下にローム層が被熱によって硬化した 7.5YR5/6 明褐色の炉床あり

033 号



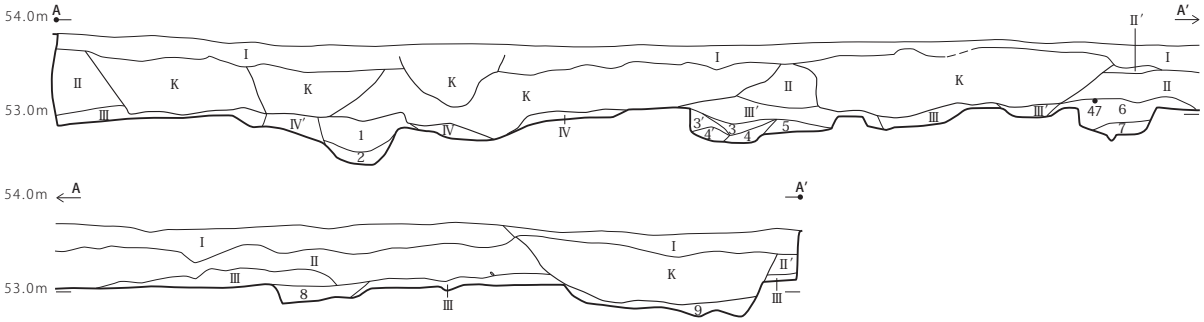
基本層序

Ⅰ　表土　7.5YR3/2 黒褐色土　粘性なし　しまり弱い　砂質、植物による撹乱多い
Ⅱ　旧耕作土　7.5YR3/1 黒褐色土　粘性ややなし　しまりやや弱い　水分多い
Ⅱ′ 旧耕作土　7.5YR3/1 黒褐色土　粘性ややなし　しまりやや弱い　水分多い
　一部撹乱される
Ⅲ　ローム漸移層　7.5YR2/3 極暗褐色土～ 7.5YR4/4 褐色土に漸移
　粘性ややあり　しまり弱い
Ⅲ′ ローム漸移層　7.5YR2/3 極暗褐色土～ 7.5YR4/4 褐色土に漸移
　粘性ややあり　しまり弱い　一部撹乱される
Ⅳ　ローム層　7.5YR4/6 褐色土　粘性あり　しまりあり　ソフトローム
Ⅳ′ ローム層　7.5YR4/6 褐色土　粘性あり　しまりあり　ソフトローム　一部撹乱される



第5図　上椎木遺跡（第4地点）断面図（2）

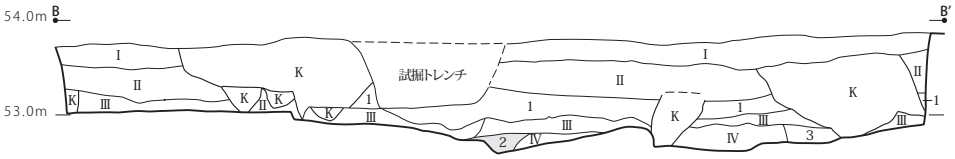
全体



基本層序

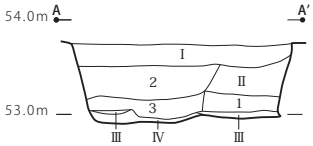
Ⅰ　表土　7.5YR3/2 黒褐色土　粘性なし　しまり弱い　砂質、植物による撹乱多い
Ⅱ　旧耕作土　7.5YR3/1 黒褐色土　粘性ややなし　しまりやや弱い　水分多い
Ⅱ′ 旧耕作土　7.5YR3/1 黒褐色土　粘性ややなし　しまりやや弱い　水分多い
　一部撹乱される
Ⅲ　ローム漸移層　7.5YR2/3 極暗褐色土～ 7.5YR4/4 褐色土に漸移
　粘性ややあり　しまり弱い
Ⅲ′ ローム漸移層　7.5YR2/3 極暗褐色土～ 7.5YR4/4 褐色土に漸移
　粘性ややあり　しまり弱い　一部撹乱される
Ⅳ　ローム層　7.5YR4/6 褐色土　粘性あり　しまりあり　ソフトローム
Ⅳ′ ローム層　7.5YR4/6 褐色土　粘性あり　しまりあり　ソフトローム　一部撹乱される

1　7.5YR3/4 暗褐色土　粘性なし　しまりなし　径 1 ～ 8 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子を少量含む　（019 号 1 層）
2　7.5YR3/3 暗褐色土　粘性ややあり　しまりなし　径 2 ～ 6 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子を少量
　（1 層よりは多い）含む　（019 号 2 層）
3　2.5YR4/6 赤褐色土　粘性なし　しまり強い　径 2 ～ 10 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子が非常に多く混じる
　（021 号 4 層）
3′ 2.5YR4/6 赤褐色土　粘性なし　しまり強い　径 2 ～ 10 ㎜の 2.5YR5/8 明赤褐色粒子が、3 層より多く混じる
　（021 号 4 層）
4　5YR4/4 にぶい赤褐色土　粘性なし　しまりややあり　被熱により小礫状に土が固まる
　直下に被熱しひび割れた 5YR6/6 橙色のローム層（炉床）あり　（021 号 6 層）
4′ 5YR4/4 にぶい赤褐色土　粘性なし　しまりややあり　被熱により小粒状に土が固まる
　直下に被熱しひび割れた 5YR6/6 橙色のローム層（炉床）あり　（021 号 6 層）
5　7.5YR4/3 褐色土　粘性あり　しまりあり　（021 号 5 層）
6　7.5YR3/4 暗褐色土　粘性あり　しまりなし　木の根の撹乱を受ける　（022 号 4 層）
7　7.5YR4/4 褐色土　粘性あり　しまりややあり　一部に 7.5YR3/3 暗褐色土が混じる　（022 号 3 層）
8　7.5YR4/6 褐色土　粘性ややあり　しまりあり　（023 号 2 層）
9　7.5YR2/3 極暗褐色土　粘性あり　しまりあり　7.5YR6/6 橙色のロームがまだらに混じる



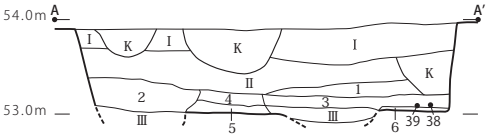
1　7.5YR3/1 黒褐色土　粘性あり　しまりあり
2　5YR5/8 明赤褐色土　粘性あり　しまりあり　5YR6/8 橙色微粒を多量含む　試掘 2 トレンチ、014 号遺構の一部
3　5YR5/6 明赤褐色土　粘性あり　しまりややなし　5YR6/8 橙色微粒を少量含む

1 トレンチ



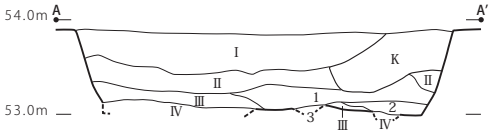
1　7.5YR2/3 極暗褐色土　粘性あり　しまりややあり　径 1 ～ 2 ㎜の白色粒子を含む
2　10YR4/4 褐色土　粘性なし　しまりなし　木の根による撹乱を受ける
3　7.5YR3/3 暗褐色土　粘性なし　しまりややあり　木の根、あるいは機械による撹乱を受ける

2 トレンチ



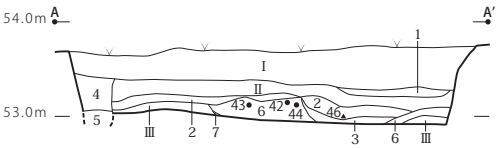
1　5YR3/1 黒褐色土　粘性なし　しまりやや弱い　径 2 ～ 3 ㎜の明赤褐色のスコリア含む
2　7.5YR3/2 黒褐色土　粘性ややあり　しまりやや弱い　植物の根多く含む
　径 3 ～ 4 ㎜の 5YR5/8 明赤褐色の粒子を含む
3　5YR3/2 暗赤褐色土　粘性なし　しまりややなし　径 2 ～ 4 ㎜の 7.5YR6/8 橙色の粒子多量含む
4　5YR3/2 暗赤褐色土　粘性あり　しまりややあり
　径 10 ～ 50 ㎜のブロック状に 7.5YR5/8 明赤褐色のロームが混じる
5　5YR4/6 赤褐色土　粘性あり　しまりややあり
6　5YR3/2 暗赤褐色土　粘性あり　しまりややあり　5YR6/8 橙色微粒をごくわずかに含む

3 トレンチ



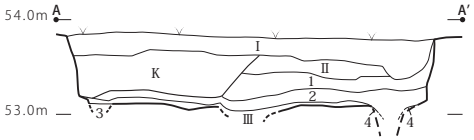
1　ローム漸移層　7.5YR2/3 極暗褐色土～ 7.5YR4/4 褐色土に漸移　粘性ややあり　しまり弱い
　木の根による撹乱を受け 7.5YR3/1 黒褐色土が混じる
2　7.5YR4/4 褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　（006 号覆土）
3　7.5YR4/3 褐色土　粘性ややあり　しまりやや弱い　水分多い

6 トレンチ



1　7.5YR2/3 極暗褐色土　粘性強い　しまり弱い　Ⅱ層（旧耕作土）が木の根に撹乱を受けた層
2　7.5YR2/3 極暗褐色土　粘性あり　しまりやや弱い　水分多い
3　7.5YR3/3 暗褐色土　粘性強い　しまりややあり
4　7.5YR3/1 黒褐色土　粘性あり　しまりなし　水分多い
5　7.5YR4/4 褐色土　粘性強い　しまりなし　ソフトローム主体　まばらに 7.5YR3/3 黒褐色土が混じる
6　7.5YR3/4 暗褐色土　粘性あり　しまりややあり　（009 号覆土）
7　7.5YR5/8 明褐色土　粘性あり　しまりなし　（009 号覆土）

8 トレンチ

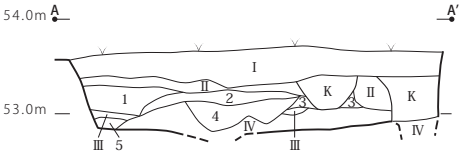


1　7.5YR2/2 黒褐色土　粘性ややあり　しまりあり　径 2 ～ 5 ㎜の明赤褐色のシャモットがごくまばらに混じる
2　7.5YR3/2 黒褐色土　粘性あり　しまりあり
3　7.5YR3/2 黒褐色土　粘性あり　しまりなし
4　7.5YR4/6 褐色土　粘性あり　しまりややあり　7.5YR3/3 暗褐色土がまだらに混じる

0　2m
（1 ／ 80）

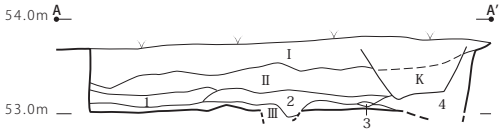
第6図　上椎木遺跡（第4地点）断面図（3）

9トレンチ



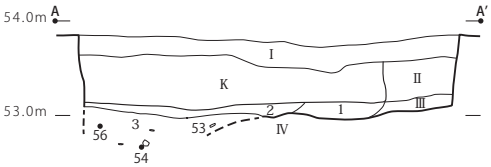
1　7.5YR3/2 黒褐色土　粘性ややなし　しまりやや弱い
2　7.5YR3/3 暗褐色土　粘性ややなし　しまりややあり
3　7.5YR4/4 褐色土　粘性ややあり　しまり弱い　植物の根により撹乱を受ける
4　7.5YR2/3 極暗褐色土　粘性ややなし　しまりややあり　粒子細かい
5　7.5YR5/6 明褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　植物の根による撹乱を受ける

10トレンチ

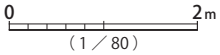


1　7.5YR4/3 褐色土　粘性ややあり　しまりやや弱い
2　7.5YR4/4 褐色土　粘性ややあり　しまりややあり
3　7.5YR3/4 暗褐色土　粘性あり　しまりやや弱い　水分多い　植物の根により撹乱を受ける
4　7.5YR4/6 褐色土　粘性あり　しまりややあり　7.5YR7/6 橙色土がまだらに混じる

11トレンチ



1　7.5YR2/2 黒褐色土　粘性強い　しまり強い　わずかにⅢ層(ローム漸移層)が混入する
2　7.5YR2/3 極暗褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　水分多く、粒子細かい
3　7.5YR2/2 黒褐色土　粘性あり　しまりなし　下部ほど褐色になる　径２～３㎜の 5YR5/8 明褐色の焼土粒がまばらに混じる　(003 号覆土)



第7図　上椎木遺跡(第4地点) 断面図(4)

今回調査区では、撹乱により破壊を受けている遺構が多々あるため、三戸式期の遺構も存在した可能性がある。また、土器の他にもストーンボイリングに転用された磨石(第9図21)や、土器片錘(第9図31)など、当時の生活の様相を垣間見る事のできる遺物が出土している。

隣接する道路部分で実施された上椎木遺跡第２地点(椎津中林遺跡ＢⅡ地区)の調査では、85基の炉穴群を検出しており、そのうち60基が早期後葉のもの(他25基は時期不明)と判断されている(宮本1986)。今回調査区でとらえた遺構群は、周辺の動向と整合的である。なお、袖ケ浦市側の上椎木遺跡(清水川台遺跡)の範囲で確認されたような奈良時代後期の遺構・遺物が当調査区から検出されなかったことから、昭和59・60年度調査時に推測されたように、県道の東側、市原市側には奈良時代の遺構は所在しない、もしくは希薄であると考えられる。

引用参考文献

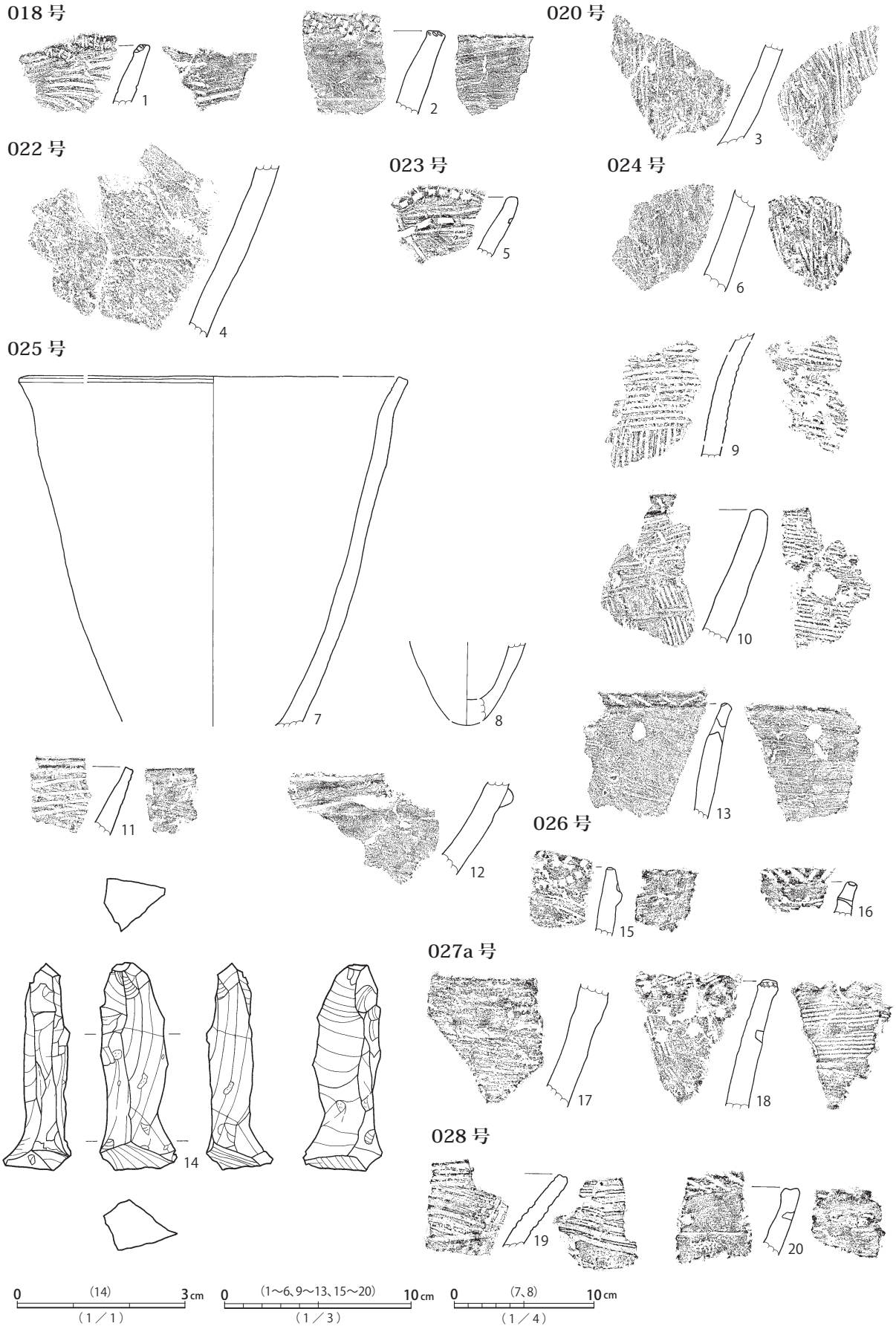
北見一弘2003「椎津新林遺跡」『平成14年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会

佐久間豊他1983『清水川台遺跡発掘調査報告書』財団法人君津郡市文化財センター

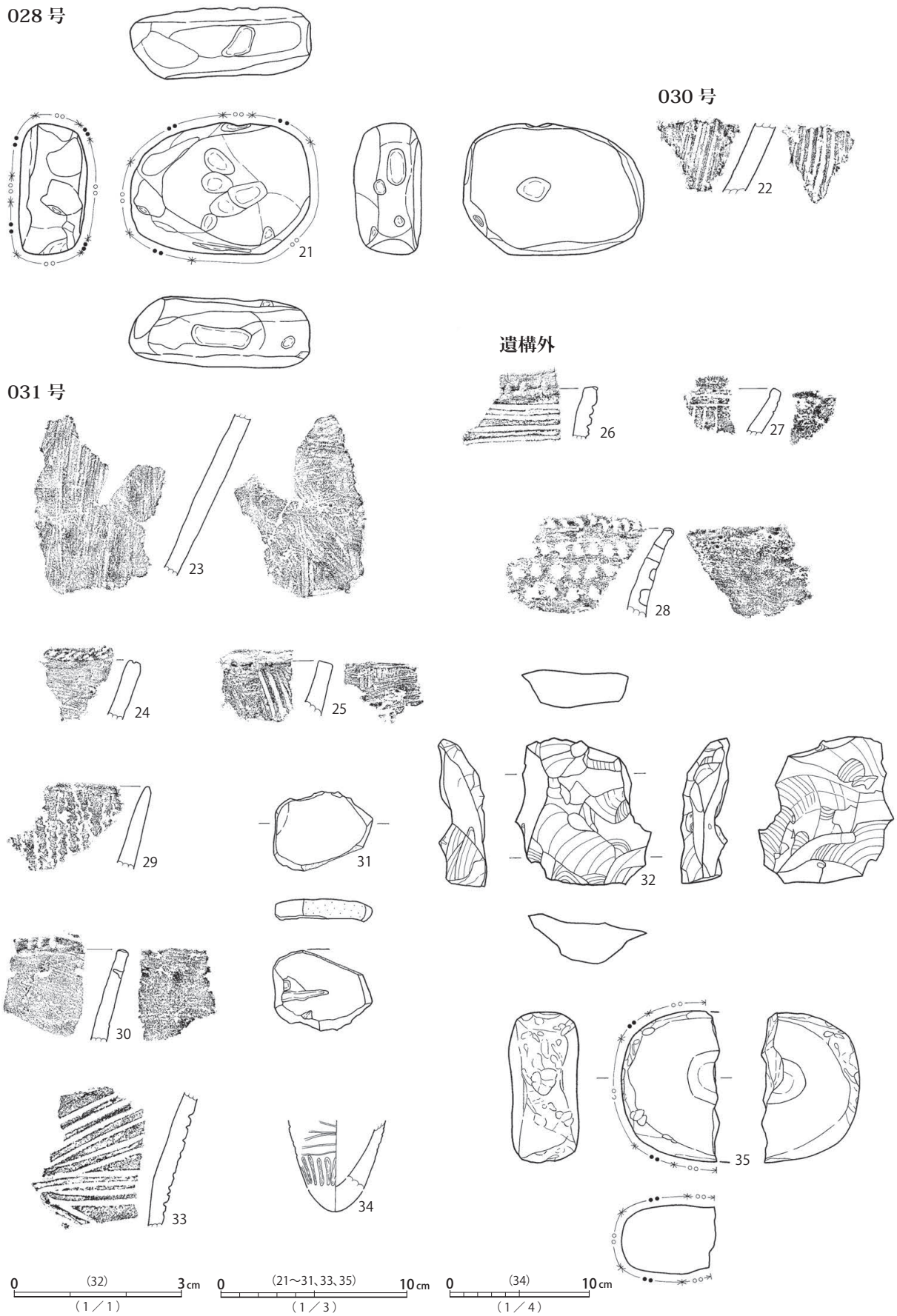
佐久間豊他1999『豆作台遺跡Ⅰ－東京都千葉福祉園整備工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－』財団法人君津郡市文化財センター

宮本敬一1985「椎津中林遺跡」『市原市文化財センター年報(昭和59年度)』財団法人市原市文化財センター

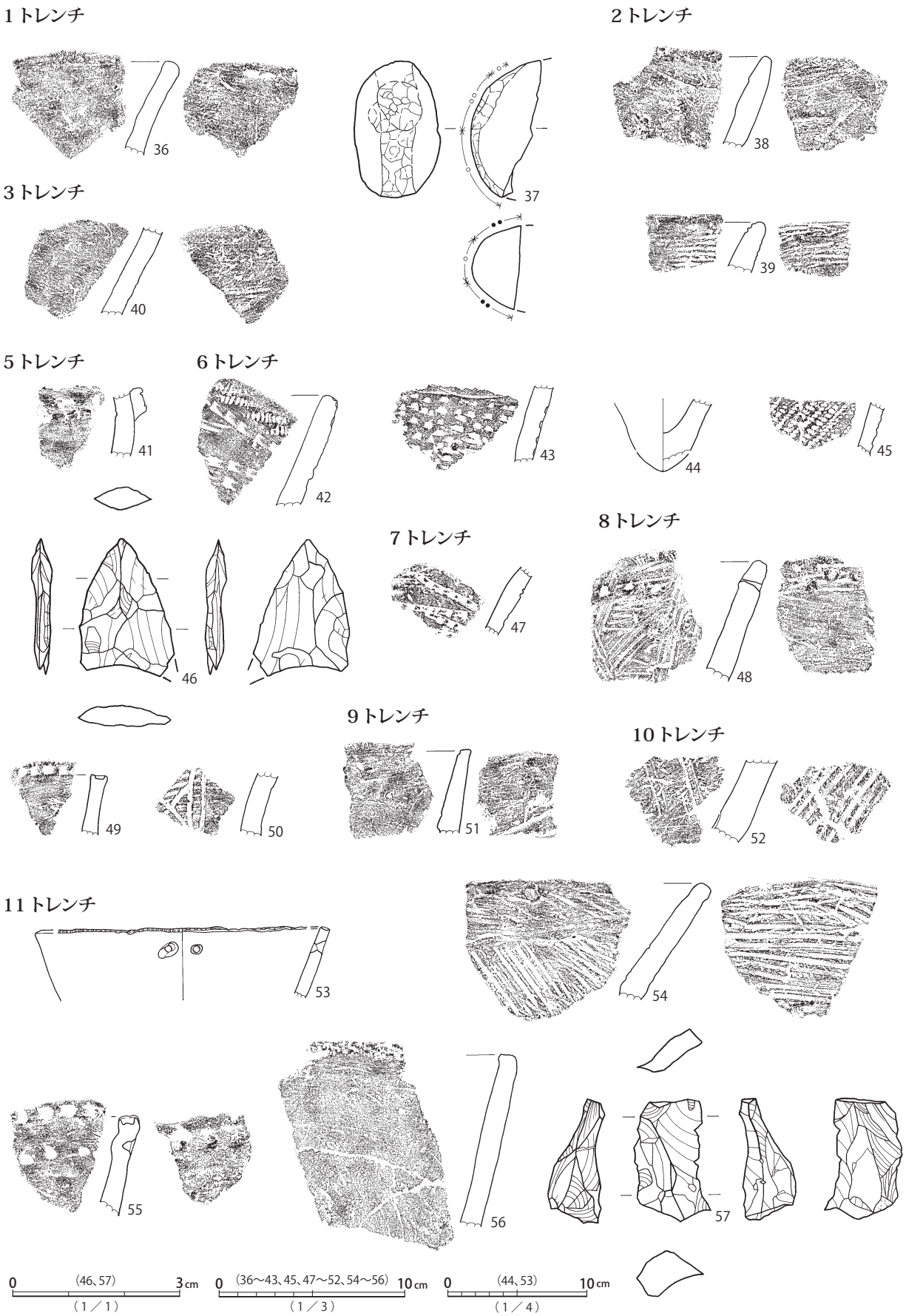
宮本敬一1986「椎津中林遺跡」『市原市文化財センター年報(昭和60年度)』財団法人市原市文化財センター



第8図　上椎木遺跡（第4地点）出土遺物 実測図（1）



第9図　上椎木遺跡（第4地点）出土遺物 実測図（2）



第10図　上椎木遺跡（第4地点）出土遺物 実測図（3）

3　瀬又小滝遺跡（第２地点）

遺跡の位置　瀬又小滝遺跡は、村田川本流の上流域、河口から約12km陸地に入った、一小谷を望む台地縁辺部に位置する。今回の調査区は標高約67m、千葉市との境界に近い住宅地の一画に所在する。東方約500ｍに縄文時代の遺跡である瀬又中ノ台遺跡や、南方約500m地点に縄文、古墳、奈良・平安時代の複合遺跡である小丸兵遺跡が所在する。市境に位置するため周辺の遺跡としては千葉市の遺跡も多く、北方約600ｍに位置する十文字遺跡や、西方約800ｍに位置する大滝辺田遺跡など、いずれも縄文時代の遺跡と想定されるが、周辺に調査事例は少ない。当遺跡に関しては、調査地点から西方約200mの第１地点において平成９年に100㎡を対象とした本調査（田中2000）が実施されているのみである。この調査では、縄文時代早期後半の竪穴状遺構1基と土坑11基（うち陥し穴6基）を検出し、遺構からは田戸上層式土器が確認されている。

調査概要　調査は個人住宅の建設に伴う確認調査であり、調査区に対しほぼ均等になるよう５本のトレンチを設定し実施した。第１地点調査において縄文時代早期後半の遺構・遺物が検出されていたため、調査に際しては炉穴や土坑に注意し掘削を進めた。その結果、2・3・4トレンチから土坑が１基ずつ、5トレンチからは土坑４基を確認し、そのうち006号土坑から縄文土器の小片が出土した。

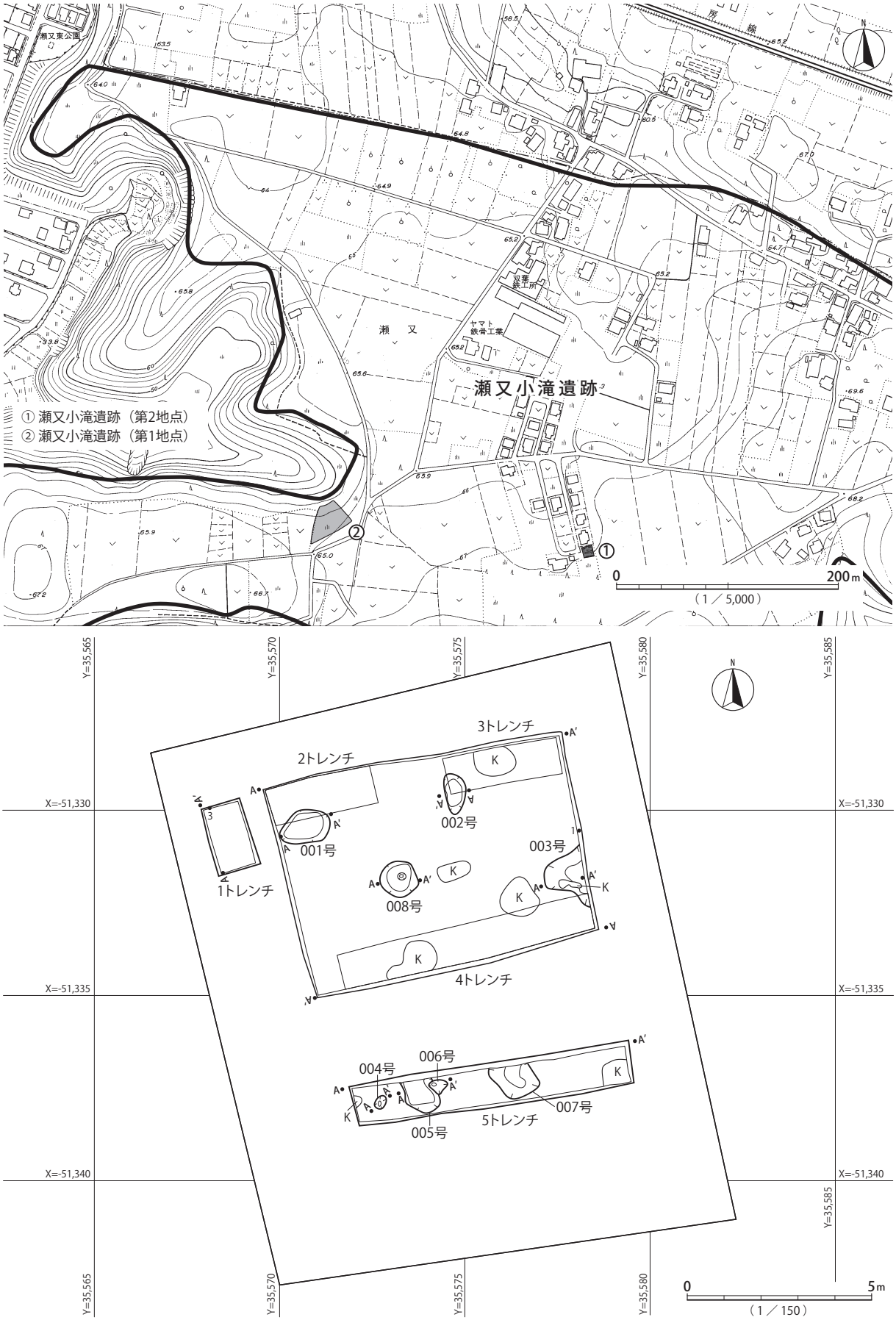
以上の確認調査の結果を受け、住宅建築予定地である2・3・4トレンチを拡張し本調査を実施した。土器を伴う006号がⅢ層であるローム漸移層を掘り込んでいるため、掘削の目安とした。本調査の結果、001・002・003号の形が捕捉でき、調査区の中央から008号土坑を検出した。また、本調査掘削中に調査区東側の壁面から土器片が出土している。

遺構と遺物　5トレンチ006号において出土した縄文土器は図示には至らない小片であるが、残る形態的特徴から加曽利E式と判断した。そのため、006号と覆土が似通う001～004号土坑も同時期の遺構と推定された。1トレンチからも加曽利E式土器が出土しているが、耕作土である第Ⅱ層上部からの出土のため、紛れ込んだ可能性が高い。

また、本調査では008号土坑を新たに検出した。土坑の中心にピットが存在したため、陥し穴の可能性もあるが、深度がそれほどないため断定は難しい。本調査では001～004号を掘削したものの、遺物は検出されなかった。遺構に伴わない遺物としては、東側の壁から出土した時期不明の土器片（第12図1）と磨石（第12図2）を確認している。なお、当地点で検出された加曽利E式土器は、千葉市側の十文字遺跡などに出土例が見られる。

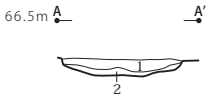
当遺跡周辺では、縄文時代中期や古墳時代前期の土器片が表面採集されており、加えて第１地点調査においては早期の土坑群が検出されている。周辺には広い範囲にわたって多様な時期の遺構が分布する可能性があるものの、今回調査において遺物は僅少であった。

引用参考文献
田中清美2000「瀬又小滝遺跡」『市原市文化財センター年報（平成９年度）』財団法人市原市文化財センター



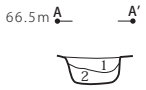
第11図　瀬又小滝遺跡（第2地点）周辺地形図・平面図

001 号



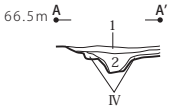
1　7.5YR2/3 極暗褐色土　粘性あり　しまりなし
2　7.5YR4/3 褐色土　粘性あり　しまりややあり
　一部に 20 ～ 40 ㎜の 7.5YR2/3 極暗褐色土の染みが混じる

002 号



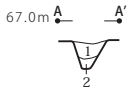
1　7.5YR2/3 極暗褐色土　粘性あり　しまりなし
2　7.5YR4/3 褐色土　粘性あり　しまりややあり
　一部に 20 ～ 40 ㎜の 7.5YR2/3 極暗褐色土の染みが混じる

003 号



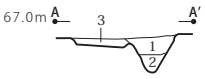
1　7.5YR2/3 極暗褐色土　粘性あり　しまりなし
2　7.5YR4/3 褐色土　粘性あり　しまりややあり
　一部に 20 ～ 40 ㎜の 7.5YR2/3 極暗褐色土の染みが混じる

004 号



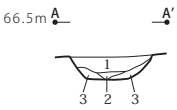
1　7.5YR2/3 極暗褐色土　粘性あり　しまりなし
2　7.5YR4/3 褐色土　粘性あり　しまりややあり
　一部に 20 ～ 40 ㎜の 7.5YR2/3 極暗褐色土の染みが混じる

005・006 号



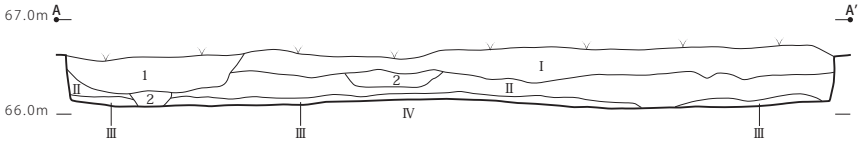
1　7.5YR2/3 極暗褐色土　粘性あり　しまりなし
2　7.5YR4/3 褐色土　粘性あり　しまりややあり
　一部に 20 ～ 40 ㎜の 7.5YR2/3 極暗褐色土の染みが混じる
3　7.5YR4/4 褐色土　粘性あり　しまりややあり
　一部に 10 ～ 20 ㎜の 7.5YR2/3 極暗褐色土の染みが混じる

008 号



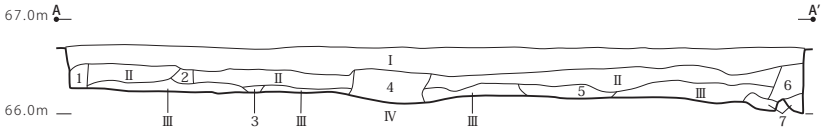
1　7.5YR3/2 黒褐色土　粘性あり　しまりなし
　10 ～ 30 ㎜の 7.5YR4/6 褐色土がブロック状に少量混じる
2　7.5YR4/4 褐色土　粘性あり　しまりややあり
3　7.5YR4/4 褐色土　粘性あり　しまりあり　2 層よりやや明るい

北壁面



1　7.5YR2/3 極暗褐色土　粘性なし　しまりなし　（撹乱）
2　7.5YR3/3 暗褐色土　粘性なし　しまりややあり　（撹乱）

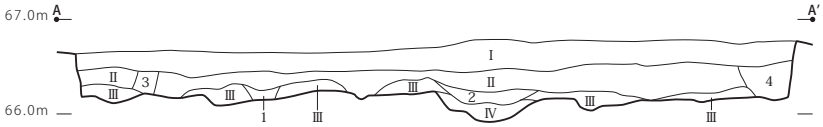
南壁面



1　7.5YR3/4 暗褐色土　粘性ややあり　しまりなし　20 ～ 50 ㎜の染み状にロームが多く混じる　（撹乱）
2　7.5YR3/3 暗褐色土　粘性ややあり　しまりなし　20 ～ 50 ㎜の染み状にロームが混じる　（撹乱）
3　7.5YR3/1 黒褐色土　粘性ややなし　しまりややあり　（撹乱）
4　7.5YR3/3 暗褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　（撹乱）
5　7.5YR3/4 暗褐色土　粘性ややあり　しまりあり　（撹乱）
6　7.5YR3/2 黒褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　（撹乱）
7　7.5YR3/4 暗褐色土　粘性ややあり　しまりあり　ロームの比率が多い　（撹乱）

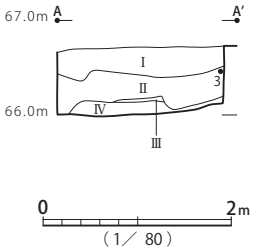
基本層序
Ⅰ　5YR3/2 暗赤褐色土　粘性なし　しまりなし　耕作により撹乱される
Ⅱ　5YR2/4 極暗赤褐色土　粘性なし　しまりなし　耕作により撹乱される
Ⅲ　7.5YR3/4 暗褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　耕作により撹乱される
Ⅳ　7.5YR4/4 褐色土　粘性あり　しまりややあり

5 トレンチ

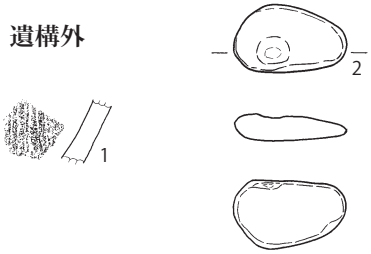


1　7.5YR3/3 暗褐色土　粘性ややあり　しまりなし　2 ～ 4 ㎜の 7.5YR5/4 にぶい褐色の粒子を微量含む
2　7.5YR3/3 暗褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　007 号遺構覆土
3　7.5YR3/3 暗褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　7.5YR4/6 褐色のロームが染み状に混じる　（撹乱）
4　7.5YR3/2 黒褐色土　粘性ややあり　しまりなし　（撹乱）

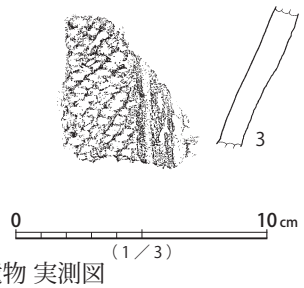
1 トレンチ



遺構外



1 トレンチ

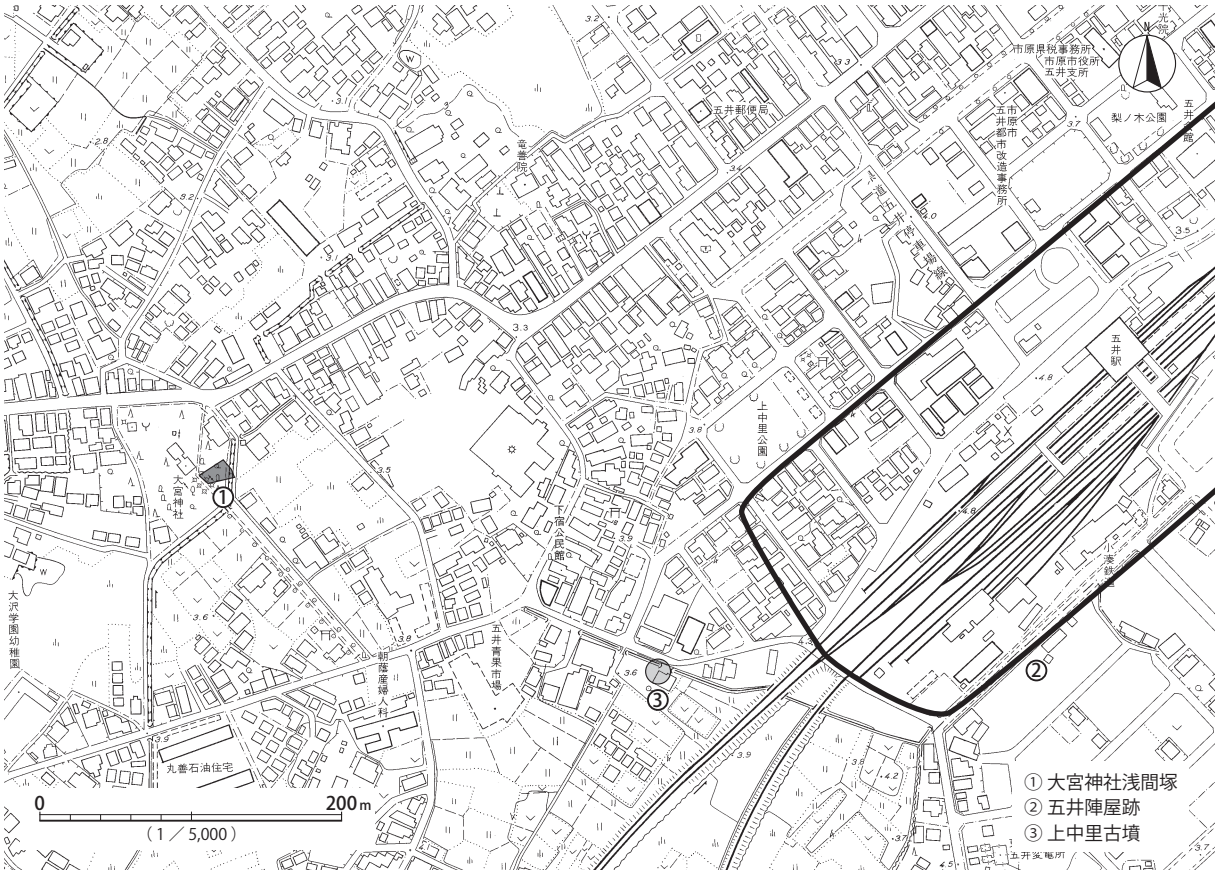


第12図　瀬又小滝遺跡（第2地点）断面図・出土遺物 実測図

4　大宮神社浅間塚

遺跡の位置　調査区は養老川河口部右岸、海岸平野上の標高約2.8m前後の微高地上の大宮神社内に位置する。大宮神社から約500ｍ東のJR五井駅周辺には、既に消滅しているが近世の陣屋である五井陣屋跡が所在した。また、大宮神社から約400ｍ南東には直径約5mの円墳である、上中里古墳がかつて所在しており、旧海岸線の砂堆上に小規模な古墳が築かれている。

調査概要　調査は塚の老朽化による移築工事に伴い、事業面積197.383㎡の約10%を対象に行った。当該塚は遺跡分布地図で近世として登録されているが、塚に隣接する大正３年銘の「参明藤開山碑」には、明治42年に養老川沿岸吹上清地の齋庭から、大宮神社内に塚を改築したことが記されており、近代の遺構である可能性があることから、塚の築造時期を把握するため、確認トレンチ（1、2トレンチ）を設定した。さらに周辺に小型円墳が分布することから、古墳を転用していることも考えられたため、周溝を確認するトレンチ（3トレンチ）も設定した。調査の結果、1トレンチの墳丘構築土内から、近世陶磁器に共伴して明治時代以降の近代磁器や、近代瓦が出土し、塚の築造は「参明藤開山碑」の記載の通り、明治時代以降であることが明らかとなった。また、3トレンチでは周溝は確認されず、古墳の転用もなされていないことが分かった。なお、墳丘については墳丘測量を実施し、コンター図を作成した（第14図）。墳丘を覆う溶岩については、デジタルカメラ画像から三次元モデルを作成し記録した（図版３・４）（Metashape Professional（64bit）ver.1.5.2（Agisoft社）使用）。



第13図　大宮神社浅間塚 周辺地形図

遺構と遺物　塚の規模は直径約10ｍの円形で、高さ約2.5ｍ、鳥居に面する南西側は２段の平場が設けられ、溶岩を積み上げるなど丁寧に築造する。一方、北東側に平場は設けず、溶岩の配置もまばらで鳥居側からの景観を意識した作りである。塚上には合目石や、神社銘の入った石造物が置かれ、実物の富士山を模した作りとなっている。また丸石で登山道を表現しており、鳥居側が吉田道、北東側が須走道で、五合目付近に中道がある。ただし中道は塚背面まで周らない。塚の頂上部には「冨士嶽神社」銘の石碑を建て、その左右には円錐状のひときわ大きな溶岩を設置する。石碑の置かれた位置を内院ととらえた場合、左右の溶岩については富士八峰を表現している可能性がある。

トレンチは１トレンチと２トレンチを墳丘部分に設定した。１トレンチでは塚の構築状況が観察できた。塚直下に旧表土は残っておらず、塚構築部分を地ならししたのち、墳丘構築土を積み上げている。墳丘構築土は貝肥混じりの黒褐色土と浅黄色砂質土の互層で、版築状につき固められている。市原市域では近世以降、砕いた貝を水田の肥料として利用する「貝肥」が知られており、貝肥混じりの黒褐色土は水田由来、浅黄色砂質土は地山由来とみられる。版築の単位は６層ほどと細かく、層の厚さも薄く、丁寧に積み上げられている（第15図）。出土遺物は墳丘構築土中から、産地不明の近世磁器碗片と、近代肥前系磁器合子片が共伴して出土した（第15図１・２）。また、墳丘基底からは、近代丸瓦が出土した（第15図３）。この丸瓦は玉縁式で、凹面に布目痕がなく、成型台圧痕が見られることから、明治時代以降の一枚づくり丸瓦と考えられる。墳丘構築土や墳丘基底部で、近世磁器が出土するものの、近代磁器や近代瓦が共伴して出土することから塚が明治時代以降に築造されたものであることが明らかとなった。２トレンチは墳丘裾部分に設定した。２トレンチの構築状況も１トレンチとほぼ同様であるが、版築の単位は３層のみで、層も厚いため、塚の中央部から離れるほど、版築は丁寧でなくなるようである（第15図）。出土遺物は堺産とみられる近世陶器擂鉢や、いわゆる「くらわんか」手の近世肥前磁器深皿、近代瀬戸系磁器碗、近世軒桟瓦が出土した（第15図４～７）。これらはハマグリを多く含む、近代の撹乱付近から出土した。３トレンチでは貝肥混じりの黒褐色土の旧水田面を確認し、塚に伴う周溝は確認できなかった（第15図）。塚の東側は水田であったことが明らかとなり、近隣の水田から採取した土を墳丘構築土として利用していることが考えられる。

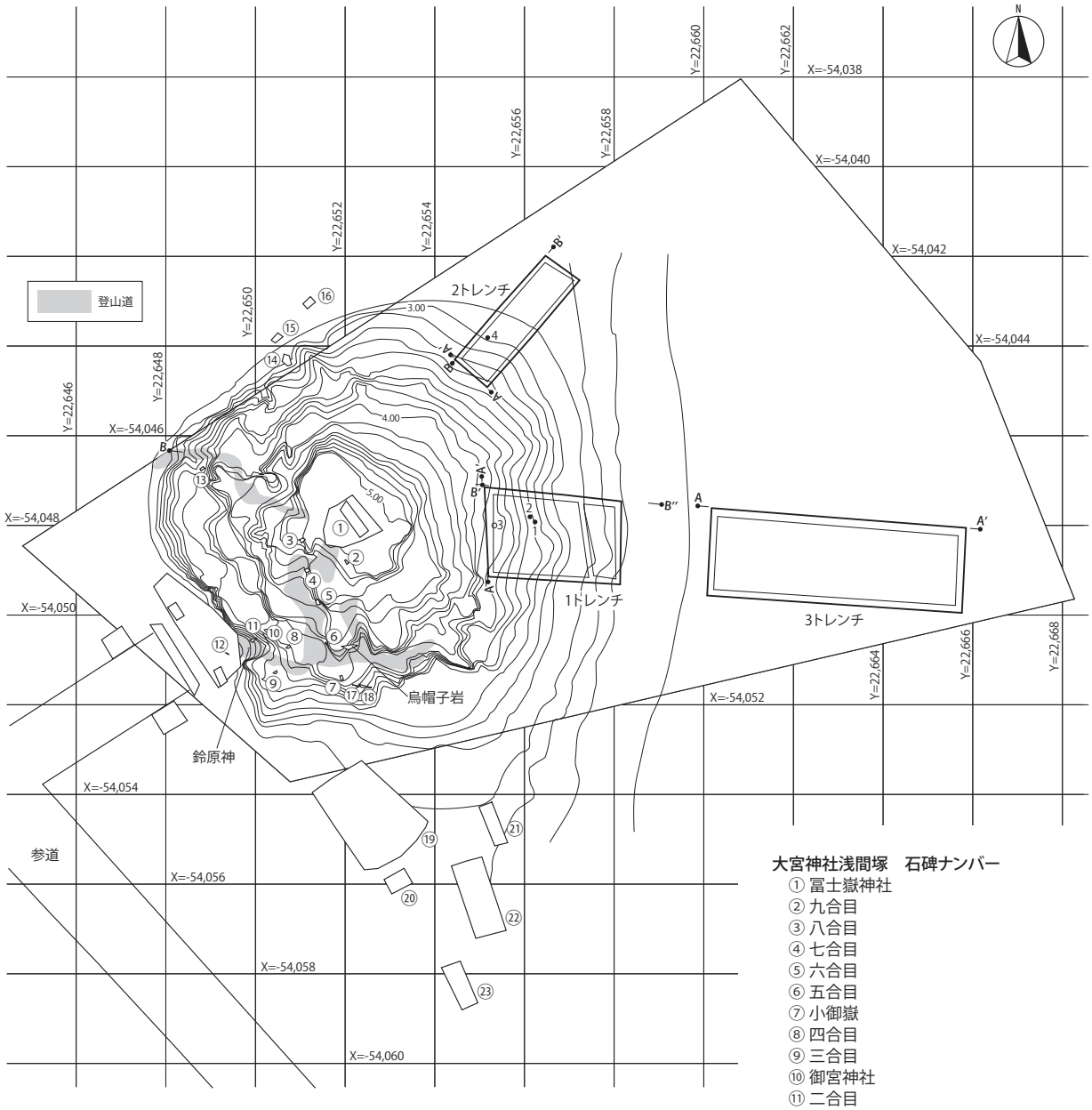
今回の調査では近世とみられていた富士塚が、近代のものであることが明らかとなった。このことは、「参明藤開山碑」の記載を裏付けるものであり、同時に碑の史料的価値を高めるものであるといえよう。さらに塚構築位置を地ならしした後、塚周囲の土を版築状につき固めながら盛るという、墳丘構築方法が明らかとなった。この際、粘性の強い貝肥混じりの水田由来土と、地山由来の砂質土の互層とすることで、強度を高めている。全国的に調査例の少ない富士塚の構築方法を知るうえで、貴重な成果である。富士塚の起源は安永八年（1779）に、食行弥勒の弟子藤四郎によって築かれた江戸の高田富士を起源とする。藤四郎は植木屋であり、造園技術を活用して富士塚を構築したと考えられるが、大宮神社浅間塚についても、大正９年庚申年銘「第参十八回　庚申御□　修築記念碑」に「庭園師　木口敦」とあり、富士塚の維持に庭園師を確認でき興味深い。

引用参考文献

大橋康二1989『肥前磁器』ニュー・サイエンス社

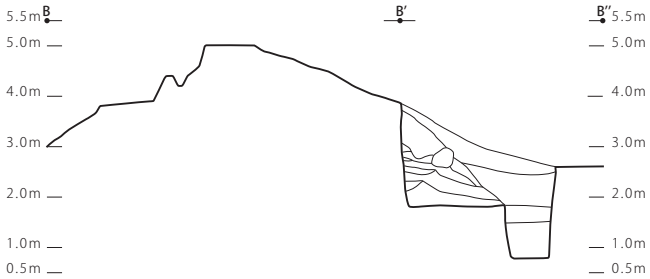
沖本　博1988「富士塚」『房総の石仏』第６号　房総石造文化財研究会

古泉　弘2013「富士講の流行と富士塚」『事典　江戸の暮らしの考古学』吉川弘文館



大宮神社浅間塚　石碑ナンバー

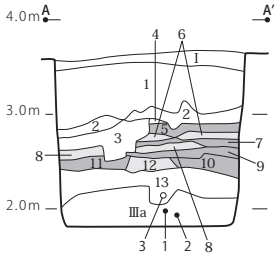
① 冨士嶽神社
② 九合目
③ 八合目
④ 七合目
⑤ 六合目
⑥ 五合目
⑦ 小御嶽
⑧ 四合目
⑨ 三合目
⑩ 御宮神社
⑪ 二合目
⑫ 一合目
⑬ 須走道
⑭ 奉納
⑮ 奉　大正元年十二月吉日
⑯ 納　下區講社
⑰ □□□□
⑱ 大天狗　小御岳尊大権現　小天狗
⑲ 第参十八回　庚申御□　修築記念碑
⑳ 石灯籠
㉑ 参明藤開山
㉒ 贈　少教区　壽行稚月翁之命
㉓ 大祖参神　参明藤開山



0　5m
（1／150）

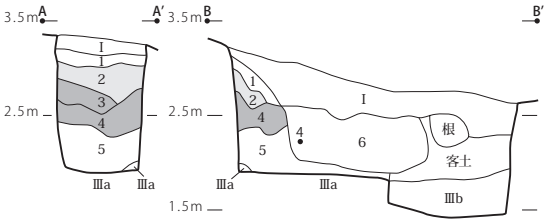
第14図　大宮神社浅間塚 平面図・断面図（1）

1トレンチ



1　2.5Y6/6　明黄褐色砂質土　1～2㎜の白色粒微量含む　径30㎝ほどの黒褐色の貝肥混入土ブロックが混ざる　ややしまる　墳丘旧表土
2　10YR4/4　褐色砂質土　1～2㎜の白色粒、明黄褐色粒微量含む　ややしまる　墳丘構築土
3　7.5YR3/2　黒褐色砂質土　1～10㎜の明黄褐色砂質土粒少量混入　貝肥混入　しまり弱い　墳丘構築土
4　10YR5/4　にぶい黄褐色砂質土　1～2㎜の黒色粒微量含む　よくしまる　墳丘構築土
5　10YR2/2　黒褐色土　1～5㎜の黒色粒、褐色粒微量含む　わずかに貝肥混入　ややしまる　墳丘構築土
6　2.5Y7/4　浅黄砂質土　1～6㎜の黒色粒、黄橙色粒微量含む　よくしまる　墳丘構築土
7　10YR2/2　黒褐色土　1～5㎜の褐色粒少量含む　貝の細片わずかに含む　ややしまる　墳丘構築土
8　2.5Y7/4　浅黄色砂質土　1～2㎜の黒色粒、白色粒少量含む　貝肥やや含む　よくしまる　墳丘構築土
9　10YR2/2　黒褐色土　1～5㎜の白色粒、褐色粒、黄褐色粒多く含む　貝肥やや含む　よくしまる　墳丘構築土
10　10YR2/2　黒褐色土　1～5㎜の白色粒、褐色粒、黄褐色粒多く含む　貝肥多く含む　よくしまる　墳丘構築土
11　10YR3/3　暗褐色土　1～3㎜の黒色粒少量含む　浅黄色砂質ブロックが混ざる　貝肥多く含む　ややしまる　墳丘構築土
12　10YR4/3　にぶい黄褐色砂層　1～5㎜の黒色粒、褐色粒少量含む　貝肥やや含む　しまり弱い　墳丘構築土
13　10YR4/3　にぶい黄褐色砂層　1～3㎜の石英粒少量含む　しまり弱い　墳丘基底
Ⅰ　撹乱表土
Ⅲa　10YR4/3　にぶい黄褐色砂層　1～3㎜の白色粒、石英粒微量含む　よくしまる　地山

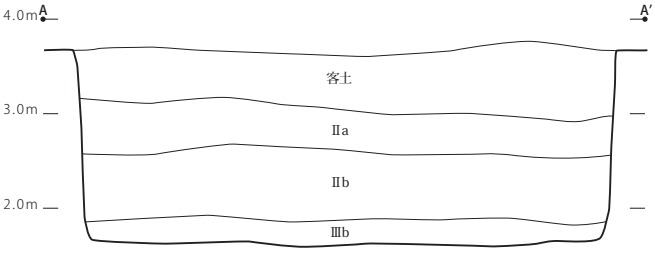
2トレンチ



1　2.5Y6/6　明黄褐色砂質土　1～2㎜の白色粒微量含む
　径30㎝ほどの黒褐色の貝肥混入土ブロックが混ざる　ややしまる　墳丘旧表土
2　10YR4/4　褐色砂質土　1～2㎜の白色粒、明黄褐色粒微量含む　ややしまる　墳丘構築土
3　10YR2/2　黒褐色土　1～5㎜の白色粒、褐色粒、黄褐色粒多く含む　貝肥やや含む　よくしまる　墳丘構築土
4　10YR2/2　黒褐色土　1～5㎜の白色粒、褐色粒、黄褐色粒多く含む　貝肥多く含む　よくしまる　墳丘構築土
5　10YR4/3　にぶい黄褐色砂層　1～3㎜の石英粒少量含む　しまり弱い　墳丘基底
6　10YR3/2　黒褐色砂質土　1～5㎜の白色粒、褐色粒やや含む　ハマグリ多く含む　しまり弱い　近代撹乱
Ⅰ　撹乱表土
Ⅲa　10YR4/3　にぶい黄褐色砂層　1～3㎜の白色粒、石英粒微量含む　よくしまる　地山
Ⅲb　5BG6/1　青灰色砂層　1～5㎜の白色粒、石英粒やや含む　よくしまる　地山

貝肥混入土
砂質土

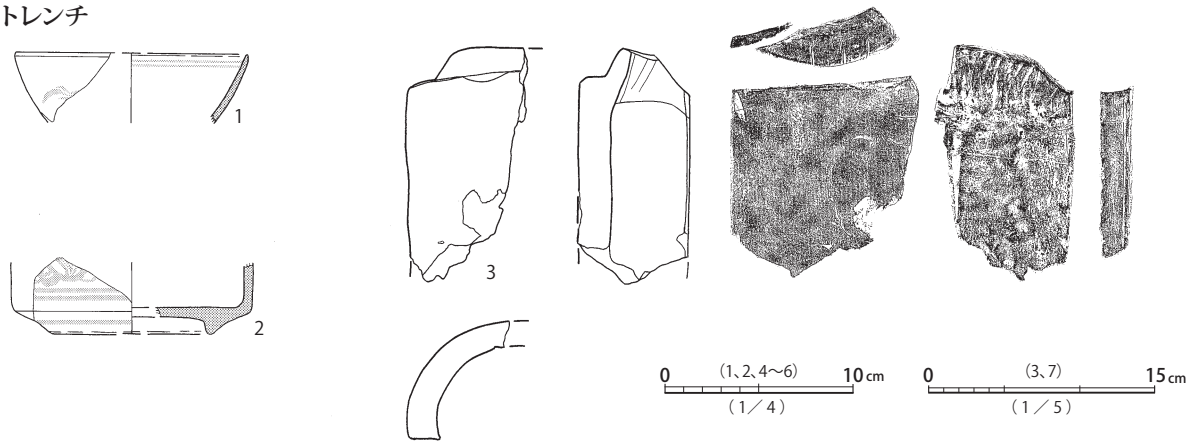
3トレンチ



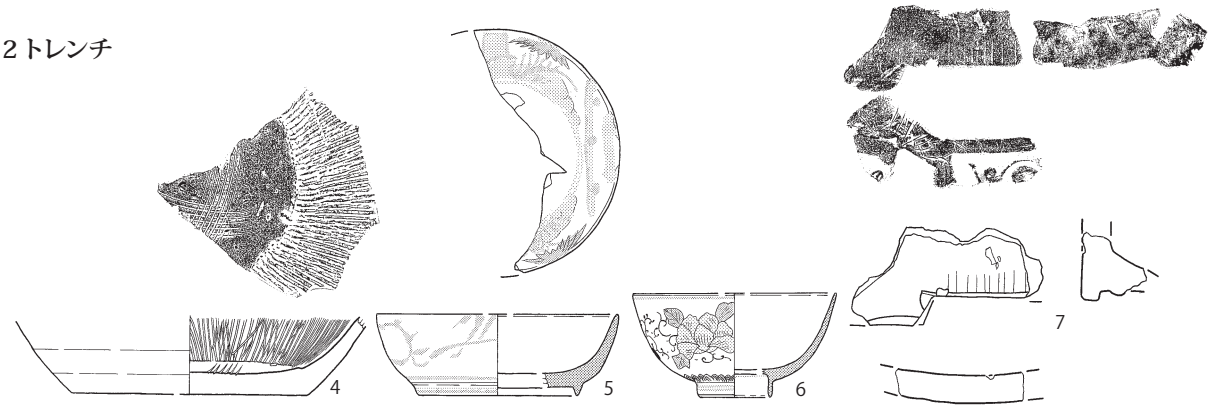
Ⅱa　10YR3/1　黒褐色土　1～3㎜の白色粒、褐色粒少量含む　貝肥多く含む　粘性強い　ややしまる　旧水田面
Ⅱb　10YR3/1　黒褐色粘質土　1～3㎜の白色粒、褐色粒少量含む　粘性強い　ややしまる　泥炭層
Ⅲb　5BG6/1　青灰色砂層　1～5㎜の白色粒、石英粒やや含む　よくしまる　地山

0　2m
（1／80）

1トレンチ



2トレンチ



第15図　大宮神社浅間塚 断面図(2)・出土遺物 実測図

5　南大広遺跡（C地区）

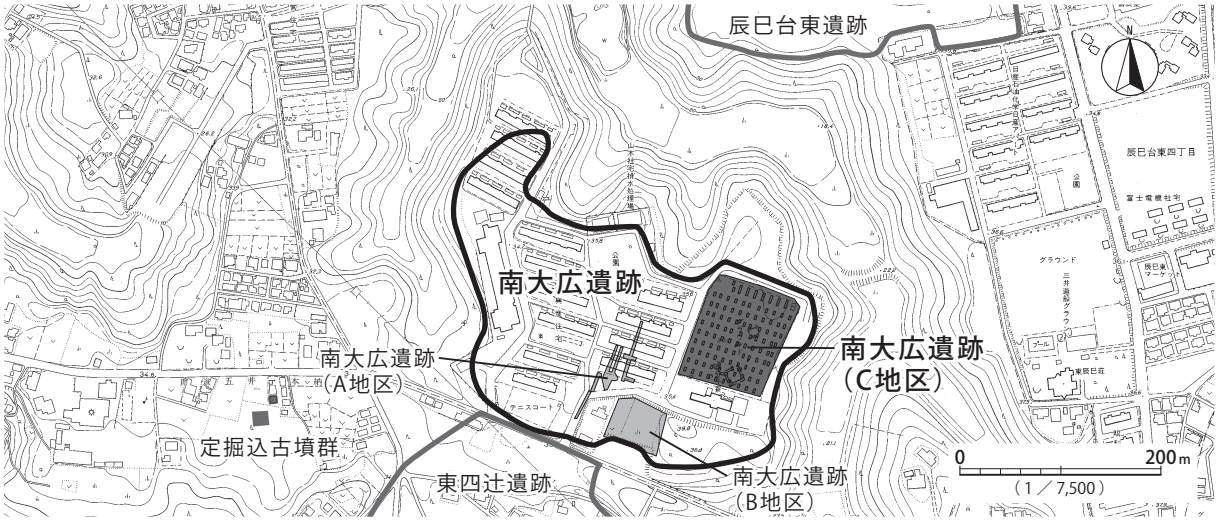
遺跡の位置　遺跡は、市原台地中央部を流れる新田川支流によって開析された、標高34～35ｍ前後の台地東側縁辺部に位置する。

新田川との比高差は約20mあり、当調査区の北西から南東にかけて小支谷の進入がある。地形上、西側から東側にかけて、緩斜面状に標高が低下していくと考えられるが、調査着手前、現地は野球グラウンドとして整備されており、特に西側部分については、削平されていることが予想された。

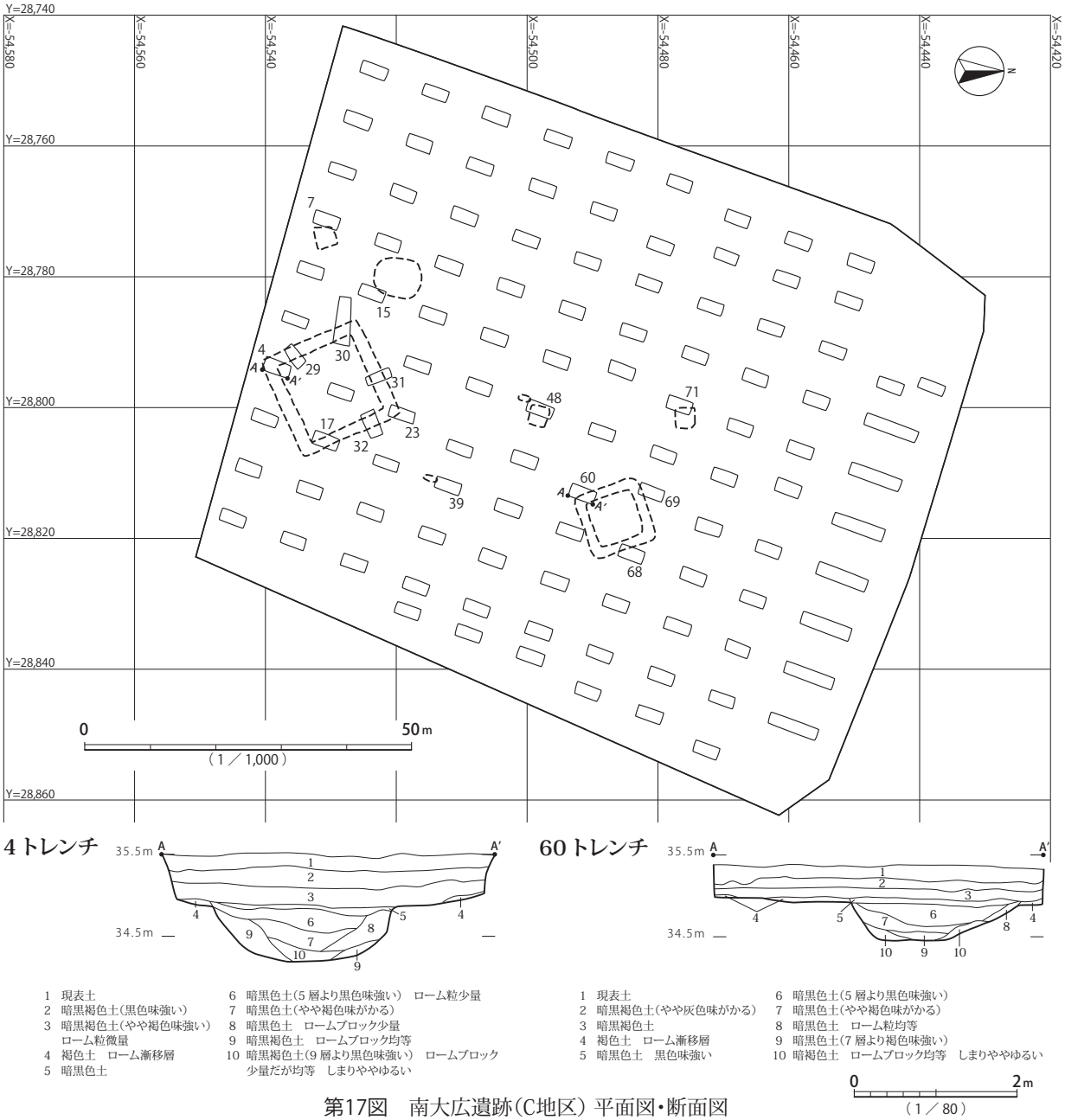
調査概要　当遺跡は、今回の調査地点から西方100ｍ程の位置で、昭和42年8月5日から12日にかけて、早稲田大学考古学研究室が発掘調査を実施しており、2棟の竪穴建物跡や、製鉄址1基が検出されている。製鉄址では、「寺」と書かれた墨書土器や、釘、フイゴの羽口や瓦が出土している（中村・市毛1968）。

また、南西側100ｍ程の位置では、平成3年度、能満南大広遺跡（B地区）として調査が行われており、奈良・平安時代の竪穴建物跡5棟、溝2条、掘立柱建物跡2棟、方形基壇1基、小鍛冶跡1基などが検出された。出土遺物は、布目瓦、緑釉小瓶片、鉄滓、須恵器、土師器などであり、方形基壇の中央からは蕨手大刀、南西及び南東隅には刀子が埋納された状態で出土しており、鎮壇遺構と考えられている（田中1995）。昭和42年調査時に出土した「寺」と書かれた墨書土器や、B地区で検出された方形基壇の存在から、この一帯が寺院跡であることが判明しており、今回の調査地点においても、当該期を中心とする遺構の広がりが想定された。

遺構と遺物　15トレンチにおいて、弥生時代後期竪穴建物跡を確認した。前述したように、調査着手前に野球グラウンドとして整備されており、西側に位置する本遺構は、上面を削平されていた。7トレンチからは、平安時代前期と考えられる竪穴建物跡を確認した。15トレンチ同様、上面を削平されており、遺存状況はよくない。4・17・23・29・30・31・32トレンチでは、古墳時代終末期と考えられる方墳を確認した。周溝を含む軸長が16ｍ前後を呈すると考えられる。周溝の確認面覆土は、暗黒色土を基本とする。39トレンチでは、縄文時代早期の土坑を確認し、48トレンチにおいては、平安時代前期の竪穴建物跡を確認している。また、71トレンチでは、奈良・平安期の竪穴建物跡を



第16図　南大広遺跡（C地区）周辺地形図



第17図　南大広遺跡（C地区）平面図・断面図

確認している。小規模な竪穴建物跡であろうか。60・68・69トレンチでは奈良時代前期の方形周溝状遺構を確認した。周溝を含む軸長が10ｍ前後を呈すると考えられる。周溝の確認面覆土は、黒色土を基本としていた。上面が削平された竪穴建物跡や、出土遺物がほとんどない方墳などが検出遺構の主体であり、出土遺物は僅少である。

今回調査区は確認調査の結果を踏まえ、令和元年７月から９月まで本調査を実施した。詳細は本調査報告書（浅野2020）を参照されたい。

引用参考文献

浅野健太 2020『南大広遺跡（Ｃ地区）』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第48集
小林信一他 1997「南大広遺跡」『千葉県文化財センター研究紀要18』財団法人千葉県文化財センター
田中清美 1995「能満南大広遺跡（Ｂ地区）」『市原市文化財センター年報（平成３年度）』財団法人市原市文化財センター
中村恵次・市毛　勲 1968「南大広遺跡・海保古墳群」『市原市埋蔵文化財調査報告４』千葉県市原市教育委員会

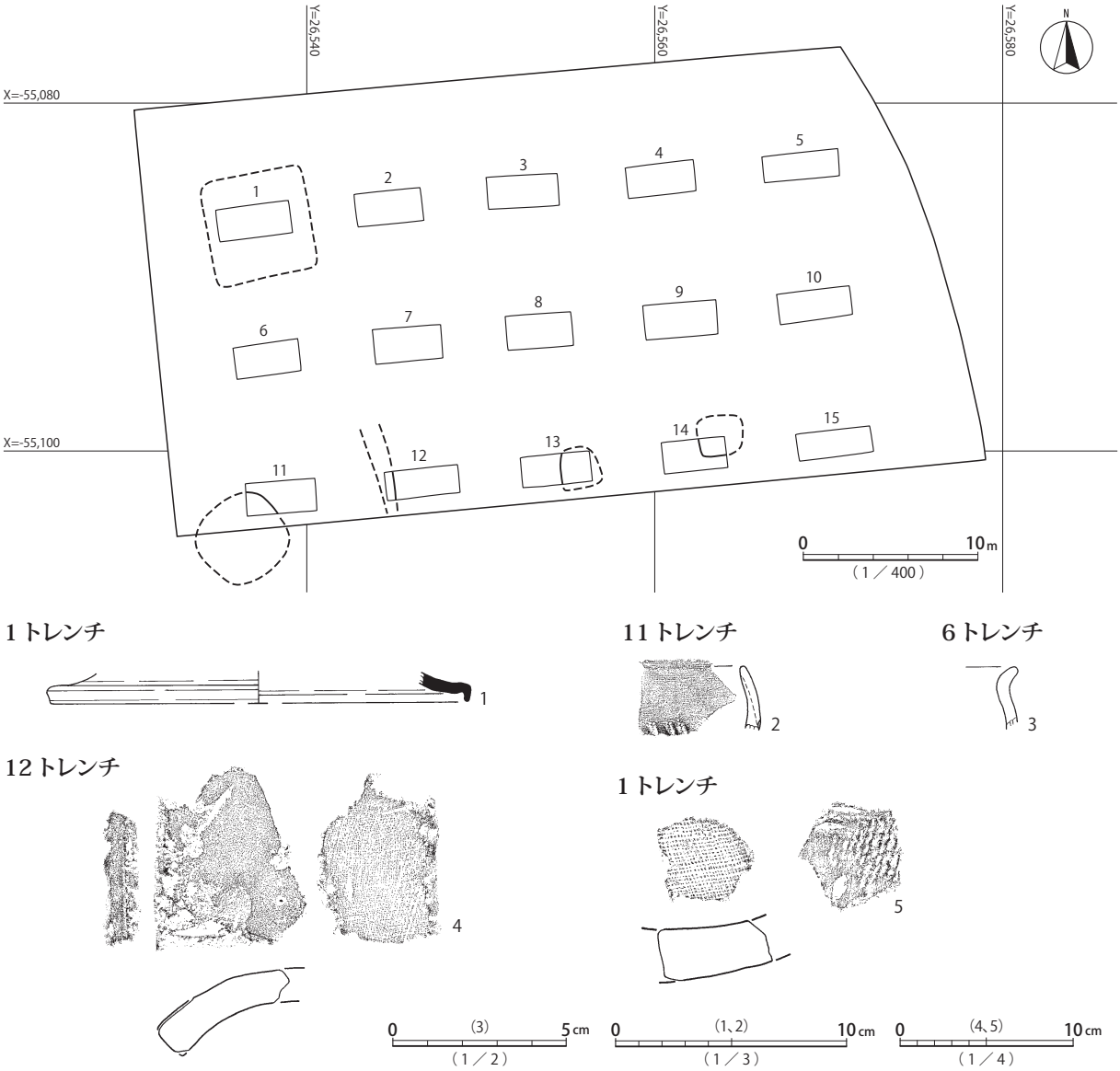
6　稲荷台遺跡（O地点）

遺跡の位置　遺跡は、西に東京湾を望む市原台地にあり、白幡川水系によって開析された、標高26m程度の台地西側縁辺部に位置する。当調査区の北は小支谷が西側から入り込んでおり、「在長面」という小字を有している。稲荷台遺跡は、これまで虫食い状に発掘調査が行われており、現在Q地点まで及ぶ。その中心的な遺跡として知られるのが南方約250mに位置するE地区である。昭和53～55年に発掘調査が行われ、四面廂を持つ掘立柱建物跡を含む多数の掘立柱建物跡や、犠牲獣を伴う祭祀跡を検出したのをはじめ、大量の緑釉陶器が出土しており、国府関連遺跡と考えられている。今回調査では、国府関連遺構の分布把握を念頭に置いた。また、南東130mに位置する、平成14年度に発掘調査が行われたJ地点においては、国道297号に並走する古代道路跡の大規模な切り通しが検出されている。幅13.7m～14.8m、深さ約3mの溝状の掘り込みを持つ道路状遺構であり、3面以上の硬化面が確認された。中世期において、大規模な改変が行われている可能性が高いものの、国府関連遺構を結ぶ交通路として注目される。

調査概要　発掘調査は調査対象範囲1,070㎡に対し、トレンチを15本設定して行った。西側に隣接するL地点のトレンチ方向を踏まえ、東西方向のトレンチ設定とした。現場は、駐車場として使用されていた場所であり、車両の沈み込み防止のために、一部、堆積土を入れ替えて造成されている箇所があり、遺構の残存状態は良くなかった。L地点で確認された富士宝永火山灰も確認されなかった。

遺構　調査の結果、弥生時代後期竪穴建物跡1棟、奈良・平安時代竪穴建物跡3棟及び平安時代の溝状遺構1条を確認した。遺構が確認されるトレンチと、撹乱が著しく遺構を確認することができないトレンチが混在しているが、東側に向かって激しく撹乱されている状況が確認された。L地点の遺構のピークとされる弥生時代後期と奈良・平安時代の遺構を、本地点でも確認しており、L地点と同様の遺構が展開していると考えられる。竪穴建物跡はいずれも出土遺物が少なく、帰属時期の把握は困難な状況である。とくに東側に向かって遺構の残存状況が悪くなる傾向があり、床面下の掘り方のみが遺存している遺構も確認された。1トレンチでは、奈良・平安時代の竪穴建物跡を確認した。竪穴建物跡内にトレンチが収まる状況となっており、覆土は黒色土を主体とし、深さは30cm程度と推定される。11トレンチにおいては、弥生時代後期の竪穴建物跡を確認した。北東隅部を確認し、覆土は黒褐色土を主体とし、深さは20cm程度と推定される。12トレンチでは、平安時代前期を中心とした溝状遺構を確認した。幅1.0m程度の小規模な溝で、深さは30cm程度と推定される。覆土は、黒色土を主体とする。硬化面が確認されなかったため、道路状遺構ではないと考えられる。E地区の建物跡群を維持管理した成員の居住域を区画する小規模な溝だったのだろうか。13トレンチでは、平安時代頃と考えられる竪穴建物跡を確認した。床面下部の掘り方が露出している状況であるが、南側の硬化が著しい。出土遺物は無く、帰属時期の把握は困難である。隣接するL地点の状況も鑑み、平安時代としたが、中世の方形竪穴となる可能性も残されている。14トレンチも遺構の残存状況が極めて悪く、遺構の確認は困難であったが、平安時代を中心とすると考えられる竪穴建物跡を確認した。柱穴は確認されず、床面全体が著しく硬化していると考えられる。出土遺物は無く、帰属時期の把握は13トレンチ同様、困難である。同じく、中世の方形竪穴となる可能性もある。

第18図　稲荷台遺跡（O地点）周辺地形図



第19図　稲荷台遺跡（O地点）平面図・出土遺物 実測図

遺物　出土遺物は、堆積土が激しく撹乱され、遺存状況の極めて悪い竪穴建物跡や、上面が削平され、床面の掘り方のみが残る竪穴建物跡を中心としており、僅少である。1トレンチからは、遺構内から須恵器蓋（第19図1）、及び平瓦（第19図5）が出土している。11トレンチからは、遺構内から縄文原体による刻み目を施した弥生後期鉢形土器口縁部（第19図2）が出土している。12トレンチからは、遺構内覆土上層から丸瓦（第19図4）が出土している。凸面にはナデが加えられ、凹面には布目痕を有する。他には、6トレンチからミニチュア土器（第19図3）が出土している。

引用参考文献

浅利幸一他2003『市原市稲荷台遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅸ　財団法人市原市文化財センター

牧野光隆2003「稲荷台遺跡」『平成14年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会

出土遺物観察表

凡例：寸法の（ ）は現存値、？は推定復元値を示す。

上椎木遺跡（第 4 地点）土器観察表

挿図 No.	図版 No.	遺物 No.	トレンチ No.	遺構 No.	注記	種別	器種	部位	周遺存	寸法 cm			焼成	胎土	色調		特徴		備考
										口径	器高	底径			外面	内面	外面	内面	
8	7	1	－	018	セ 568 001 一括	縄文土器	深鉢	口縁	小片	－	(3.0)	－	普通	やや粗い　白色微粒、繊維含む	7.5YR4/2 褐～ 7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR4/1 褐	棒状工具による沈線文 口縁部に押型文による刻み	条痕文　繊維痕	縄文時代早期
8	7	2	－	018	セ 568 001　4	縄文土器	深鉢	口縁	小片	－	(4.7)	－	極めて良好	密　1mm 以下の小礫多く含む 白色微粒、海綿骨針、褐鉄鉱少量含む　銀雲母微量含む	7.5YR5/3 にぶい褐～ 7.5YR6/6 橙	10YR5/4 にぶい黄褐	口縁部肥厚→押型文　横方向擦痕　繊維痕　一部繊維が炭化した痕跡が残る	横方向条痕	縄文時代早期
8	7	3	－	020	セ 568 003 一括	縄文土器	深鉢	底部	小片	－	(5.6)	－	良好	やや砂質　白色微粒多く含む 1mm 以下の石英微粒、ガラス片、小礫を含む	5YR5/6 赤褐	5YR2/1 黒褐～ 7.5YR6/4 にぶい橙	縦方向の擦痕	縦・斜め横方向の条痕文	子母口式
8	7	4	－	022	セ 568 005　2	縄文土器	深鉢	胴部	小片	－	(9.1)	－	普通	やや砂質　白色粒子、褐色粒子多く含む	10YR6/4 にぶい黄橙～ 7.5YR5/4 にぶい褐	10YR5/3 にぶい黄褐	器面やや荒れる 斜め横方向の擦痕あり	横方向の擦痕　繊維痕	縄文時代早期
8	7	5	－	023	セ 568 006 一括	縄文土器	深鉢	口縁	小片	－	(3.2)	－	良好	1mm 以下の小礫多く含む　白色微粒、黒色微粒、海綿骨針含む	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/3 にぶい褐	横方向擦痕　口縁部押型文 外面押型文	擦痕	縄文時代早期
8	7	6	－	024	セ 568 007　2	縄文土器	深鉢	底部	小片	－	(5.4)	－	良好	やや砂質　白色微粒多く含む 1mm 以下の小礫を含む	5YR4/6 赤褐	5YR2/1 黒褐～ 7.5YR7/4 にぶい橙	縦・横方向の擦痕	縦・斜め横方向の条痕文	子母口式
8	7	7	－	025	セ 568 008　17 008 一括	縄文土器	深鉢		1/2 以下	27.6?	(24.9)	－	普通	粗い　やや砂質　約 1 ～ 2mm の小礫多く含む　白色微粒多く含む　繊維含む	10YR4/2 灰黄褐色～ 7.5YR6/8 橙	7.5YR4/4 褐～ 7.5YR4/1 褐灰	縦・横・斜め方向の擦痕が口縁部から胴部中ほどまである 尖底部剥落する	口縁部付近に沈線あり 器面荒れる　繊維痕多い	子母口式
8	7	8	－	025	セ 568 008　15	縄文土器	深鉢	底部	1/4 以下	－	(5.6)	－	良好	やや粗い　やや砂質　白色微粒多く含む　1mm 以下の小礫、ガラス片もしくは石英微粒を多く含む　銀雲母含む	10YR4/3 にぶい黄褐	10YR4/2 灰黄褐	ヘラ状工具による縦方向ナデ 一部に棒状工具による擦痕あり	器面荒れる　繊維痕	縄文時代早期
8	7	9	－	025	セ 568 008 一括	縄文土器	深鉢	胴部か？	小片	－	(6.5)	－	良好	粗い　白色微粒とても多く含む 1mm 以下の小礫多く含む	7.5YR2/1 黒～ 7.5YR5/8 明褐	7.5YR2/1 黒～ 7.5YR3/1 黒褐	貝殻系条痕文　縦方向→横方向 器面荒れる 7.5YR5/8 明褐色の胎土が微細なひび割れから露出する	貝殻系条痕文　横方向　被熱による黒変　一部器面荒れる	縄文時代早期
8	7	10	－	025	セ 568 008 一括	縄文土器	深鉢	口縁	小片	－	(7.1)	－	使用による二次焼成あり　黒変	やや粗い　砂質　白色粒子、海綿骨針を微量に含む	7.5YR5/4 にぶい褐～ 10YR4/3 にぶい黄褐	7.5YR6/6 橙～ 10YR6/4 にぶい黄橙	口縁部に刻みあり（押型文の可能性も）　縦方向・横方向の条痕文　縦→横の順で施文	横方向の条痕文　使用による二次焼成のため黒変　器面荒れる	縄文時代早期
8	7	11	－	025	セ 568 008 一括	縄文土器	？	口縁	小片	－	(3.6)	－	使用による二次焼成あり　黒変　赤変	密　赤色微粒、白色微粒、繊維含む　黒色微粒、海綿骨針微量含む	5YR4/8 赤褐～ 10YR4/4 褐	5YR4/4 にぶい赤褐 ～ 5YR4/6 赤褐	口縁部棒状工具による成形 斜め横方向の条痕文（原体不明） 右下がりの条痕文→左下がりの条痕文	口縁部内削ぎ　斜め横方向の条痕文（原体不明）	縄文時代早期
8	7	12	－	025	セ 568 008 一括	縄文土器	深鉢	口縁付近	小片	－	(4.8)	－	良好	密　白色微粒、1mm 以下の小礫多く含む　海綿骨針少量含む 約 1mm のガラス片をごく微量含む	5YR5/6 明赤褐～ 7.5YR4/4 褐	5YR3/1 黒褐～ 5YR4/2 灰褐	横方向の擦痕あり 横工具ナデ→隆帯貼り付け→隆帯沿いにナデ	横工具ナデ→ミガキ 被熱により黒変　器面荒れる	縄文時代早期
8	7	13	－	025	セ 568 一括	縄文土器	深鉢	口縁	小片	－	(6.1)	－	使用による二次焼成あり　黒変	白色微粒、銀雲母、1mm 以下の小礫を多く含む　1mm 以下のガラス片もしくは石英微粒、黒色微粒を含む　繊維、褐鉄鉱を少量含む	7.5YR4/4 褐～ 7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/1 褐灰～ 7.5YR6/6 橙	斜め横方向の条痕文　擦痕 繊維痕　穿孔あり（補修孔か）	横方向擦痕　繊維痕	縄文時代早期
8	7	15	－	026	セ 568 009 一括	縄文土器	深鉢	口縁	小片	－	(3.5)	－	普通　使用による二次焼成あり　黒変	白色微粒、1mm 以下の小礫を多く含む　1mm 以下の石英微粒を僅かに含む	7.5YR6/4 にぶい橙～ 5YR4/4 にぶい赤褐	7.5YR4/1 褐灰～ 7.5YR6/6 橙	口縁部刻み　口縁部直下～胴部押型文　隆帯を付けたのちヨコナデ　下部に沈線文を描く	斜め横方向　繊維痕	縄文時代早期
8	8	16	－	026	セ 568 009 一括	縄文土器	深鉢	口縁	小片	－	(1.8)	－	使用による二次焼成あり　黒変	密　白色・褐色微粒含む海面骨針ごく微量含む	7.5YR3/1 黒褐～ 7.5YR4/2 灰褐	10YR5/8 明褐～ 7.5YR3/1 黒褐	焼成により器面荒れる 口縁部から約 8mm 下に並列した刺突文がある　繊維痕	外面からの刺突文により内面に半球状の凸部が生じる 一部貫通している　繊維痕	縄文時代早期
8	8	17	－	027a	セ 568 010　1	縄文土器	深鉢	胴部	小片	－	(6.6)	－	良好	密　やや砂質　繊維含む白色微粒多く含む	10YR6/6 明黄褐～ 7.5YR4/2 褐灰	10YR6/3 にぶい黄橙	横方向の擦痕 工具による屈曲部の成型	横方向工具ナデ	縄文時代早期
8	8	18	－	027a	セ 568 010 一括	縄文土器	深鉢	一括	小片	－	(6.8)	－	良好	白色微粒多く含む　1mm 大の小礫ごく僅かに含む	7.5YR4/1 褐灰～ 7.5YR4/4 褐	7.5YR5/3 にぶい褐～ 7.5YR4/2 灰褐	口縁部大きな刻み加工を施したのち、刻み部分を充填するように 4 本の沈線を描く　四か所の浅い列点の 10mm 下に深さ 6mm 程の明瞭な列点が並ぶ	明瞭な横方向の条痕文（沈線か）	縄文時代早期
8	8	19	－	028	セ 568 011　6	縄文土器	深鉢	口縁	小片	－	(3.8)	－	良好	白色微粒、褐色微粒多く含む海綿骨針、褐鉄鉱少量含む	7.5YR5/2 灰褐～ 7.5YR4/1 褐灰	7.5YR4/1 褐灰	横方向・斜め横方向　条痕文 口縁部刻み	横方向擦痕→条痕文	縄文時代早期
8	8	20	－	028	セ 568 011 一括	縄文土器	深鉢	口縁	小片	－	(3.6)	－	良好	密　白色微粒多く含む　繊維痕	7.5YR6/4 にぶい橙～ 4/1 褐灰	7.5YR6/6 橙	条痕文→棒状工具による刺突 口縁部刻み	外面刺突による内面の起伏 繊維痕	縄文時代早期

挿図No.	図版No.	遺物No.	トレンチNo.	遺構No.	注記	種別	器種	部位	周遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	焼成	胎土	色調 外面	内面	特徴 外面	内面	備考
9	8	22	—	030	セ568 015　2	縄文土器	深鉢	胴部	小片	—	(3.7)	—	良好	普通　白色粒子少量含む小礫含む	5YR4/6 赤褐	5YR6/4 にぶい橙	縦方向の条痕文　繊維痕	縦・横方向条痕文 縦方向より強い	縄文時代早期
9	8	23	—	031	セ568 016 一括	縄文土器	深鉢	胴部	1/2 以下	—	(8.5)	—	良好	白色微粒多く含む　1mm 以下の小礫、ガラス片もしくは石英微粒を少量含む	7.5YR3/1 黒褐～4/3 にぶい赤褐	7.5YR4/4 褐～ 5YR 明赤褐 5/6	縦→横・斜め方向の条痕文	縦→横→斜め方向の条痕文 繊維痕	縄文時代早期
9	8	24	—	031	セ568 016 一括	縄文土器	深鉢	口縁	小片	—	(3.2)	—	使用により二次焼成あり　赤変	密　白色微粒、1mm 以下の小礫多く含む　1mm 以下のガラス片もしくは石英微粒、銀雲母を少量含む	2.5YR5/6 明赤褐	5YR6/6 橙	擦痕　口縁部刻み 被熱による赤変	ミガキあり　被熱による赤変	縄文時代早期
9	8	25	—	031	セ568 016 一括	縄文土器	深鉢	口縁	小片	—	(2.9)	—	使用による二次焼成あり　黒変	密　白色微粒多く含む　2～3mm の 2.5YR4/8 赤褐色土の小塊、繊維を含む	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR4/3 にぶい黄褐～ 10YR3/2 黒褐	斜め縦方向の条痕文 粘土粒残る	横方向の条痕文　繊維痕	縄文時代早期
9	8	26	—	遺構外（撹乱）	セ568 カク 3 一括	縄文土器	深鉢	口縁	小片	—	(2.7)	—	良好	密　金雲母多量に含む 1 ～ 2mm 大の小礫、1mm 以下のガラス片もしくは石英微粒を含む	5YR4/4 にぶい赤褐～ 5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐～ 7.5YR6/4 にぶい橙	棒状工具による明瞭な沈線文による装飾 口縁部に半竹管による刻み	口縁付近やや内削ぎ	三戸式　026・033 号に重複する撹乱から出土
9	8	27	—	遺構外（撹乱）	セ568 カク 1 一括	縄文土器	深鉢	口縁	小片	—	(2.4)	—	普通	やや粗い　1 ～ 2mm 大の小礫、褐色粒子含む	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR5/6 明褐～ 7.5YR4/1 褐灰	擦痕 横方向沈線文→縦方向沈線文	擦痕	縄文時代早期　019 号に隣接する撹乱から出土
9	8	28	—	遺構外（撹乱）	セ568 カク 5 一括	縄文土器	深鉢	口縁	小片	—	(4.7)	—	普通	やや粗い　砂質　白色微粒多く含む　1mm 大の小礫ごく僅かに含む	5YR2/1 黒褐～ 7.5YR3/1 黒褐	7.5YR3/1 黒褐～ 7.5YR5/3 にぶい褐	横 5mm 縦 7mm の列点が縦横 5mm 感覚で三列並ぶ	外面の列点を施す際に内面も盛り上がる　繊維痕	子母口式　025 号に重複する撹乱から出土
9	8	29	—	遺構外（撹乱）	セ568 カク 5 一括	縄文土器	深鉢	口縁	小片	—	(4.3)	—	普通	やや粗い　やや砂質　白色微粒含む　1mm 以下の石英微粒を含む	7.5YR3/2 黒褐～ 5/4 にぶい褐	10YR5/3 にぶい黄褐	縦方向の波状の沈線文	横・斜め方向の擦痕	縄文時代早期　025 号に重複する撹乱から出土
9	8	30	—	遺構外	セ568 カク 9 一括	縄文土器	深鉢	口縁	小片	—	(4.8)	—	良好	密　白色微粒、銀雲母、1 ～ 2mm 大の小礫を多く含む 1mm 以下のガラス片もしくは石英微粒、銀雲母、海綿骨針、繊維を含む　褐鉄鉱を少量含む	10YR3/3 暗褐～ 4/4 褐	7.5YR5/3 にぶい褐～ 7.5YR6/4 にぶい橙	半竹管による口縁部の成型 胴部斜め方向の条痕文　擦痕 約 13mm 間隔で直径 4mm 以下の穿孔深いものだとあと 2mm で貫通する	横方向擦痕　繊維痕	縄文時代早期
9	8	33	—	遺構外	セ568 全体一括	縄文土器	深鉢	胴部	小片	—	(7.2)	—	良好	密　金雲母多量に含む 1 ～ 2mm 大の小礫　1mm 以下のガラス片もしくは石英微粒を含む	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	棒状工具による明瞭な沈線文による装飾	屈曲部にヘラナデの痕跡 一部に黒変あり	三戸式
9	8	34	—	遺構外	セ568 全体一括	縄文土器	深鉢	底部	1/4 以下	—	(4.8)	—	良好	密　白色微粒多く含む　銀雲母多く含む	10YR5/4 にぶい黄褐～ 10YR3/1 黒褐	10YR4/2 灰黄褐	横方向沈線による文様帯直下に幅約 4mm 程度のヘラ状工具による底部に向けた縦方向の文様	ミガキあり	縄文時代早期
10	8	36	1	—	セ568K 1トレ一括	縄文土器	深鉢	口縁	小片	—	(5.0)	—	使用による二次焼成あり　黒変 赤変	密　やや砂質　1mm 以下のガラス片もしくは石英微粒を多量に含む　繊維含む	5YR5/6 明赤褐	7.5YR3/2 黒褐～ 5YR4/6 赤褐	口縁を肥厚→ヨコナデ（一部ナデが甘く段が残る）　口縁横方向の擦痕　繊維痕残る	繊維痕残る 被熱による黒変、赤変	縄文時代早期
10	8	38	2	—	セ568K 2トレ(014) 2	縄文土器	深鉢	口縁	小片	—	(4.8)	—	使用による二次焼成あり　黒変	やや粗い　繊維を多く含む　白色微粒、2mm 以下のガラス片もしくは石英微粒を多く含む 海綿骨針少量含む　3mm 大の小礫混じる	7.5YR4/2 灰褐～ 5YR4/6 赤褐	7.5YR3/2 黒褐～ 5YR5/8 明赤褐	口縁部に幅 1mm 長さ 7 ～ 8mm の刻み 斜め横方向の擦痕　繊維痕残る 被熱による黒変	斜め横方向の条痕文（原体不明） 繊維痕残る 被熱による黒変	縄文時代早期
10	8	39	2	—	セ568K 2トレ(014) 1	縄文土器	深鉢	口縁	小片	—	(2.7)	—	使用による二次焼成あり　黒変	密　白色微粒、海綿骨針多く含む　繊維含む	5YR5/4 にぶい赤褐～ 5YR4/4 にぶい赤褐	7.5YR4/6 褐～ 7.5YR3/2 黒褐	横方向の条痕文（原体不明） 凹凸部ともに約 2mm 幅	斜め横方向の条痕文（原体不明） 繊維痕残る　被熱による黒変	縄文時代早期
10	8	40	3	—	セ568K 3トレ(006) 一括	縄文土器	深鉢	胴部	小片	—	(4.8)	—	使用による二次焼成あり　黒変	密　白色微粒多く含む	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙	横方向の擦痕　繊維痕	屈曲部を境に上部擦痕　下部条痕文に分かれる	縄文時代早期
10	8	41	5	—	セ568K 5トレ一括	縄文土器	深鉢	胴部か？	小片	—	(3.2)	—	良好　使用による二次焼成あり 黒変	密　白色微粒、銀雲母多く含む 繊維含む	7.5YR4/4 褐～ 7.5YR5/4 にぶい褐	10YR3/2 黒褐～ 10YR4/3 にぶい黄褐	横方向ミガキ　口縁部二つに割れる　棒状工具による強いヨコナデ　ヨコナデにより肥厚した部分に押型文を付す	横方向ミガキ　繊維痕 幅 2mm 程度の棒状工具による押圧あり	縄文時代早期
10	8	42	6	—	セ568K 6トレ18	縄文土器	深鉢	口縁	小片	—	(5.9)	—	使用による二次焼成あり　黒変	密　やや砂質　白色微粒、 1mm 以下の小礫、ガラス片もしくは石英微粒を多く含む　銀雲母微量含む	7.5YR6/6 橙～ 10YR3/1 黒褐	7.5YR7/6 橙	波状口縁　口縁部に縄文による押型文　口縁下部ヘラ状工具による押型文　その下に同様のヘラ状工具を用いた地面と平行する文様帯	斜め方向にミガキあり	縄文時代早期
10	8	43	6	—	セ568K 6トレ19	縄文土器	深鉢	胴部	小片	—	(4.1)	—	普通	やや粗い　白色微粒多く含む 1 ～ 2mm の小礫多く含む　1mm 以下のガラス片もしくは石英微粒を多く含む　繊維含む	7.5YR3/2 黒褐～ 4/2 灰褐	7.5YR4/2 灰褐	押型工具端による押し引き文が沈線文の下に充填される	器面荒れる　繊維痕および、指頭大の剥離痕あり	子母口式
10	8	44	6	—	セ568K 6トレ17	縄文土器	深鉢	底部	1/4 以下	—	(4.4)	—	普通	やや粗い　やや砂質　褐色微粒多く含む　1 ～ 2mm 以下の小礫多く含む　1 ～ 3mm のガラス片多く含む　3 ～ 4mm の小礫含む　繊維含む	5YR4/6 赤褐～ 7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR4/1 褐灰～ 7.5YR6/6 橙	擦痕　器面荒れる 尖底部剥落する（使用痕跡か）	擦痕　器面荒れる　繊維痕	縄文時代早期

挿図No.	図版No.	遺物No.	トレンチNo.	遺構No.	注記	種別	器種	部位	周遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	焼成	胎土	色調 外面	内面	特徴 外面	内面	備考
10	8	45	6	—	セ568K 6トレ一括	縄文土器	深鉢	胴部	小片	—	(2.8)	—	普通	やや粗い　1～2mm以下の小礫多く含む　1～2mm以下のガラス片もしくは石英微粒を少量含む	5YR5/6 赤明赤褐	7.5YR5/4 にぶい褐	縄文　単節RL横回転	ミガキあり	縄文時代早期
10	9	47	7	—	セ568K 7トレ2	縄文土器	深鉢	胴部	小片	—	(3.6)	—	良好	やや粗い　やや砂質　白色微粒多く含む　1mm以下の小礫、ガラス片もしくは石英微粒を含む　直径4mm以上の小礫を含む	5YR4/2 褐灰～5YR5/4 にぶい赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐～5YR5/6 明赤褐	斜め横方向の竹管文（キャタピラ文か）	横方向ミガキ	縄文時代早期
10	9	48	8	—	セ568K 8トレ フク土一括	縄文土器	深鉢	口縁	小片	—	(6.4)	—	良好　焼成による二次焼成あり　黒変	密　やや砂質　繊維含む	7.5YR7/4 にぶい橙～7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR4/2 灰褐～7.5YR5/4 にぶい褐	横→斜め方向条痕文　口縁部赤彩（5YR5/6 明赤褐）　深い列点あり、一番右のものは内面まで貫通する	横方向条痕文、外面からの列点部分が浮き出る	子母口式
10	9	49	8	—	セ568K 8トレ 覆土一括	縄文土器	深鉢	口縁	小片	—	(3.2)	—	良好	密　1mm以下の小礫僅かに含む	7YR7/4 にぶい橙	10YR6/4 にぶい黄桃	口縁部ヘラ状工具による押型文文様を付す際に口縁部肥厚する	擦痕　繊維痕	縄文時代早期
10	9	50	8	—	セ568K 8トレカク一括	縄文土器	深鉢	胴部	小片	—	(3.3)	—	良好	密 白色微粒多く含む 1～2mm の小礫を含む	5YR5/6 明赤褐	7.5YR6/6 橙	沈線による装飾　沈線やや粗い	繊維痕　器面やや荒れる	縄文時代早期
10	9	51	9	—	セ568K 9トレ一括	縄文土器	深鉢	口縁	小片	—	(4.5)	—	良好　使用による二次焼成あり　黒変　赤変	白色微粒　1mm以下のガラス片もしくは石英微粒を多く含む　銀雲母含む　繊維含む	2.5YR6/6 橙～5YR4/3 にぶい赤褐	2.5YR5/6 明赤褐～5YR4/3 にぶい赤褐	横方向ミガキ　擦痕　口縁部および口縁部指頭による押圧、一部肥厚する　繊維痕	横方向擦痕　外面に比して繊維痕顕著　幅約2mmの棒状工具による施文	子母口式
10	9	52	10	—	セ568K 10トレ一括	縄文土器	深鉢	胴部か？	小片	—	(4.4)	—	使用による二次焼成あり　黒変	やや粗い　砂質　白色微粒、繊維、1～2mm大の小礫多く含む	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR4/1 褐灰	横方向擦痕　縦方向条痕文　繊維痕　上方向の断面部が炭化し摩耗する	斜め方向　条痕文　焼成による繊維の瘢痕	縄文時代早期
10	9	53	11	003	セ568K 11トレ（003）4	縄文土器	深鉢	口縁	1/4以下	—	(5.0)	—	良好	密　褐色微粒非常に多く含む 白色微粒多く含む繊維含む	7.5YR4/1 褐灰～7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR4/1 褐灰～5/3 にぶい褐	押型文により口縁部に施文、施文箇所肥厚する　補修孔　擦痕	斜め横方向の条痕文　擦痕　瘢痕	縄文時代早期
10	9	54	11	003	セ568K 11トレ（003）6、15	縄文土器	深鉢	口縁	小片	—	(6.3)	—	使用による二次焼成あり　黒変	密　白色微粒、1mm以下のガラス片もしくは石英微粒を多く含む　海綿骨針含む　銀雲母少量含む	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR8/4 浅黄橙	口縁部棒状工具による擦痕あり一部指頭による成形があり接合痕が段状に残る　口縁から底部方向に30mm程度の部分は横方向の擦痕だがその下部は斜め方向の条痕文　繊維痕	横方向の条痕文→口縁部付近に斜め方向の条痕文　繊維痕	縄文時代早期
10	9	55	11	003	セ568K 11トレ（003）7	縄文土器	深鉢	口縁	小片	—	(5.4)	—	使用による二次焼成あり　黒変	やや粗い　やや砂質　1～4mm大の小礫多く含む　1mm以下のガラス片もしくは石英微粒を多く含む　繊維含む	7.5YR6/4 橙～7.5YR3/2 黒褐	7.5YR8/4 浅黄橙～7.5YR4/1 褐灰	口縁部に刻みと、刻みにともなう肥厚あり　一部に赤彩残る 口縁部より13mm程下部に列点あり最も深くて約6mm程度で刺突の際に内面に半球状の凸部が生じる　繊維痕残る	外面列点を刻む際内面に半球状の凸部が生じる　繊維痕残る	縄文時代早期
10	9	56	11	003	セ568K 11トレ（003）下層	縄文土器	深鉢	口縁	小片	—	(9.2)	—	良好	密　やや砂質　繊維含む　白色粒子多く含む　1～3mmの小礫、1mm以下のガラス片もしくは石英微粒を含む	7.5YR5/6 明褐色	7.5YR6/6 橙～7.5YR4/6 褐色	擦痕 繊維痕内面に比して少ない	器面荒れる　繊維痕外面に比して目立つ　最大のもので縦25mm横7mm	縄文時代早期

上椎木遺跡（第4地点）その他観察表

挿図No.	図版No.	遺物No.	トレンチNo.	遺構No.	注記	種別	寸法 cm 長軸	短軸	高さ	重量g	材質等	特徴
8	7	14	—	025（旧008）	セ568 008一括	石器	3.7	1.4	0.9	3.8	黒曜石	剥片
9	8	21	—	028（旧012）	セ568 012一括	石器	9.6	7.0	3.8	251.8	玄武岩質凝灰岩　かなり脆い	磨石と使用　全体被熱し中心部付近から折損する　ストーンボイリングに転用されたか
9	8	31	—	遺構外（撹乱）	セ568 カク6一括	土製品	5.2	4.3	1.1	26.5	土器と同様　外面2.5YR5/6 明赤褐　内面5YR5/6 明赤褐　小礫、白色微粒含む 1mm以下のガラス片を微量含む	器面と破断面が摩耗する　縄文時代早期の土器片錘 020号土坑に重複する撹乱から出土
9	8	32	—	遺構外（撹乱）	セ568 カクラン5一括	石器	2.6	2.4	0.8	5.2	黒曜石	剥片　025号に重複する撹乱から出土
9	8	35	—	遺構外	セ568 全体一括3	石器	8.0	5.3	3.8	267.4	輝石安山岩（第四紀）	側面敲打痕あり天地両面とも磨石として使用　中心部より擦り減り折損する
10	8	37	1	—	セ568K 1トレ一括	石器	7.3	3.5	4.5	115.9	火山礫凝灰岩	凹凸少なく全面良く磨かれている 側面敲打の跡あり後に磨石として使用
10	8	46	6	—	セ568K 6トレ13	石器	2.5	1.7	0.4	1.6	チャート	石鏃　一部左側欠ける
10	9	57	11	003	セ568K 11トレ（003）3	石器	2.2	1.4	0.8	1.9	黒曜石	剥片

瀬又小滝遺跡（第２地点）土器観察表

挿図No.	図版No.	遺物No.	トレンチNo.	遺構No.	注記	種別	器種	部位	周遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	焼成	胎土	色調 外面	内面	特徴 外面	内面	備考
12	9	1	－	遺構外	セ569 東カベ１	縄文土器	?	胴部	小片	－	(2.4)	－	普通	白色微粒多く含む　赤色微粒海綿骨針微量含む	2.5YR5/6 明赤褐色	2.5YR3/2 暗オリーブ褐色	縄文あるが、摩耗する	焼成により黒変する	縄文時代早期？
12	9	3	1	－	セ569 1トレ１	縄文土器	深鉢	胴部	小片	－	(5.5)	－	良好	密　砂質　白色微粒多く含む　1～2mm の長石含む	7.5YR4/2 灰褐～2.5YR 明赤褐	2.5YR3/2 黒褐	縦方向沈線に区画され、中に縄文を充填する	横位のミガキあり　ざらつく	加曽利Ｅ式

瀬又小滝遺跡（第２地点）石器観察表

挿図No.	図版No.	遺物No.	トレンチNo.	遺構No.	注記	種別	寸法 cm 長軸	短軸	高さ	重量g	材質等	特徴
12	9	2	－	遺構外	セ569 全体一括	石器	4.4	2.7	1.1	16.2	流紋岩　10YR7/6 明黄褐色～3/2 黒褐がマーブル状に混じる	正面、および即面に敲打痕あり　全面磨く

大宮神社浅間塚 陶磁器観察表

挿図No.	図版No.	遺物No.	トレンチNo.	遺構種別	注記	種別	器種	部位	周遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	焼成	胎土	色調 外面	内面	特徴 外面	内面	備考
15	9	1	1	塚	セ570 1トレ２	磁器	碗	口縁	1/4 以下	12.2?	(3.7)	－	堅緻	精緻　1mm 以下の黒色粒やや含む	10Y7/1 灰白	10Y7/1 灰白	染付　呉須で草文を描く	二重区画線	産地不明
15	7	2	1	塚	セ570 1トレ１	磁器	合子	底部	1/4 以下	－	(3.8)	8.2? (2.7)	堅緻	精緻　1mm 以下の黒色粒多く含む	N8/ 灰白	10Y8/1 灰白	染付　人造コバルト顔料で花文　高台に区画線　砂目付着	無文　底部にロクロ明瞭	肥前系近代磁器
15	7	4	2	近代攪乱	セ570 2トレ２	陶器	擂鉢	胴部～底部	底部 1/4	－	(4.2)	12.4? (7.3)	良好	精緻　7mm 以下の白色粒、褐色粒多く含む　1mm 以下の雲母粒少量含む	10R4/8 赤	10R5/8 赤	胴部ヨコナデ　底部に砂粒をまぶす	底部内面に擦り目を三角状に施す　胴部内面には放射状で密に擦り目を施す	堺産
15	7	5	2	－	セ570 2トレ一括	磁器	深皿	口縁～底部	1/2 以下	12.8?	4.4	8.4? (1.6)	堅緻	精緻　1mm 以下の黒色粒多く含む　白色粒少量含む	2.5GY7/1 明オリーブ灰	2.5GY7/1 明オリーブ灰	染付　呉須で胴部に唐草文を描く　底部に区画線を描く	染付　底部内面に二重の区画線を引く　胴部内面に竹、花文を描く	肥前磁器
15	9	6	2	－	セ570 2トレ６ 2トレ一括	磁器	碗	口縁～底部	1/4	10.7?	5.5	3.7?	堅緻	精緻　1mm 以下の黒色粒多く含む	7.5Y8/1 灰白	N8/ 灰白	染付　人造コバルト顔料で牡丹唐草文を描く　高台から胴部にかけて蓮華文を描く　高台に二重の区画線	無文	瀬戸系近代磁器

大宮神社浅間塚 瓦観察表

挿図No.	図版No.	遺物No.	トレンチNo.	遺構種別	注記	種別	器種	部位	周遺存	寸法 cm 全長	幅	厚さ	焼成	胎土	色調	特徴 瓦当面	凸面	凹面	備考
15	9	3	1	塚	セ570 1トレ３	瓦	丸瓦	玉縁	1/3	(13.0)	(6.7)	2.1	良好	やや精緻　1mm 以下の黒色粒、雲母粒やや含む	10YR4/1 褐灰	－	タテナデ調整	布目なし 棒状の成型台圧痕	一枚づくり丸瓦　近代瓦か？
15	9	7	2	－	セ570 2トレ一括	瓦	軒丸瓦	瓦当部	小片	(4.0)	(8.1)	1.8	良好	精緻　1mm 以下の黒色粒、雲母粒多く含む　白色粒少量含む	10YR4/1 褐灰	軒丸瓦部蓮華文か 軒平瓦部均整唐草文	段顎	瓦当面側に幅 0.7 ㎝ほどのケズリ調整　瓦当面に沿って成型台圧痕が残る	19 世紀中～後半か？

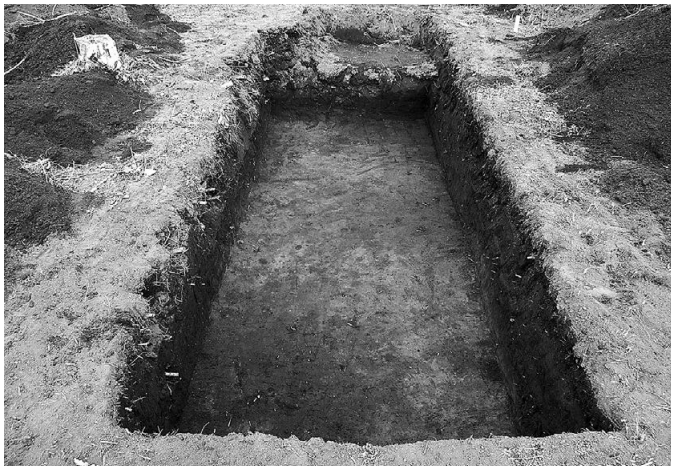
稲荷台遺跡（O 地点）土器観察表

挿図No.	図版No.	遺物No.	トレンチNo.	遺構種別	注記	種別	器種	部位	周遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	焼成	胎土	色調 外面	内面	特徴 外面	内面	備考
19	9	1	1	竪穴	セ574 1トレ４	須恵器	蓋	下端部	10/1 以下	(18.0)	(1.3)	－	良好	緻密　白色粒子　少量だが均等含む	10YR5/1 褐灰～10YR7/1 灰白	10YR6/1 褐灰	ロクロ調整	ロクロ調整	奈良時代
19	9	2	11	－	セ574 11トレ１	弥生土器	浅鉢	口縁	小片	－	(2.7)	－	良好	密　白色微粒少量含む	10R4/8 赤	10R5/6 赤	折り返し下端部に、縄文原体による刻み目施す　ヘラミガキ　赤彩	ヘラミガキ　赤彩	弥生時代後期
19	9	3	6	－	セ574 6トレ２	土製品	ミニチュア土器	口縁	小片	－	(1.8)	－	良好	密　白色微粒、海面骨針微量含む	7.5YR5/3 にぶい褐	10YR6/3 にぶい黄橙～10YR4/1 褐灰	ナデ	ナデ　ユビナデ	奈良・平安時代

稲荷台遺跡（O 地点）瓦観察表

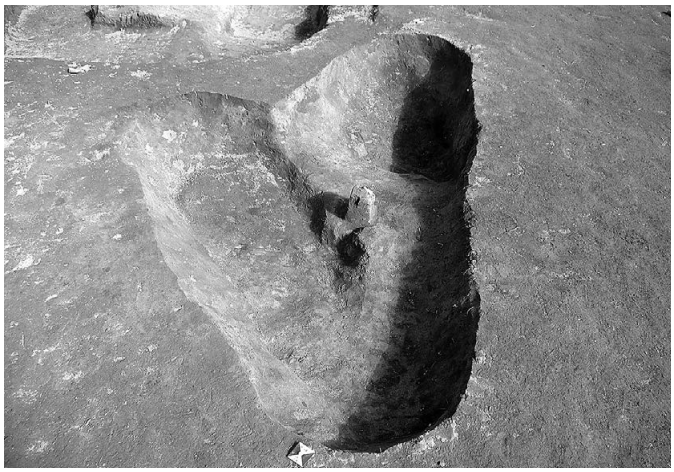
挿図No.	図版No.	遺物No.	トレンチNo.	遺構種別	注記	種別	器種	残存	寸法 cm 全長	幅	厚さ	重量g	焼成	胎土	色調 凸面	凹面	特徴 凸面	凹面	側縁・端部	備考
19	9	4	12	－	セ574 12トレ１	瓦	丸瓦	左側縁部残	(10.3)	(8.0)	1.9	189.9	良好	密　白色粒子少量含む　赤色粒子微量含む	5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	ナデ	布目痕	側縁部、ヘラケズリ	－
19	9	5	1	－	セ574 1トレ１	瓦	平瓦	側縁・端部全て欠	(6.2)	(6.1)	2.8	108.9	良好	密　白色粒子少量含む　褐色粒子微量含む	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	縄目痕	布目痕		－

上椎木遺跡　調査前（東から）


上椎木遺跡　2 トレンチ（南西から）

上椎木遺跡　7 トレンチ（北東から）

上椎木遺跡　調査風景


上椎木遺跡　024 号完掘（南から）

上椎木遺跡　025 号（東から）

上椎木遺跡　027a･b･c 号（南から）

上椎木遺跡全体（南から）

瀬又小滝遺跡　全景

瀬又小滝遺跡　1トレンチ（南から）

瀬又小滝遺跡　4トレンチ（西から）

瀬又小滝遺跡　5トレンチ（西から）

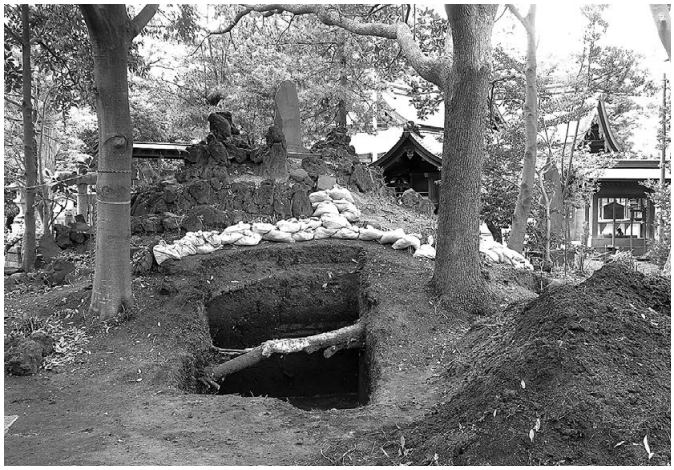
瀬又小滝遺跡　本調査風景

瀬又小滝遺跡　本調査検出面（南西から）

瀬又小滝遺跡　本調査全景（西から）

瀬又小滝遺跡　008 号（南から）

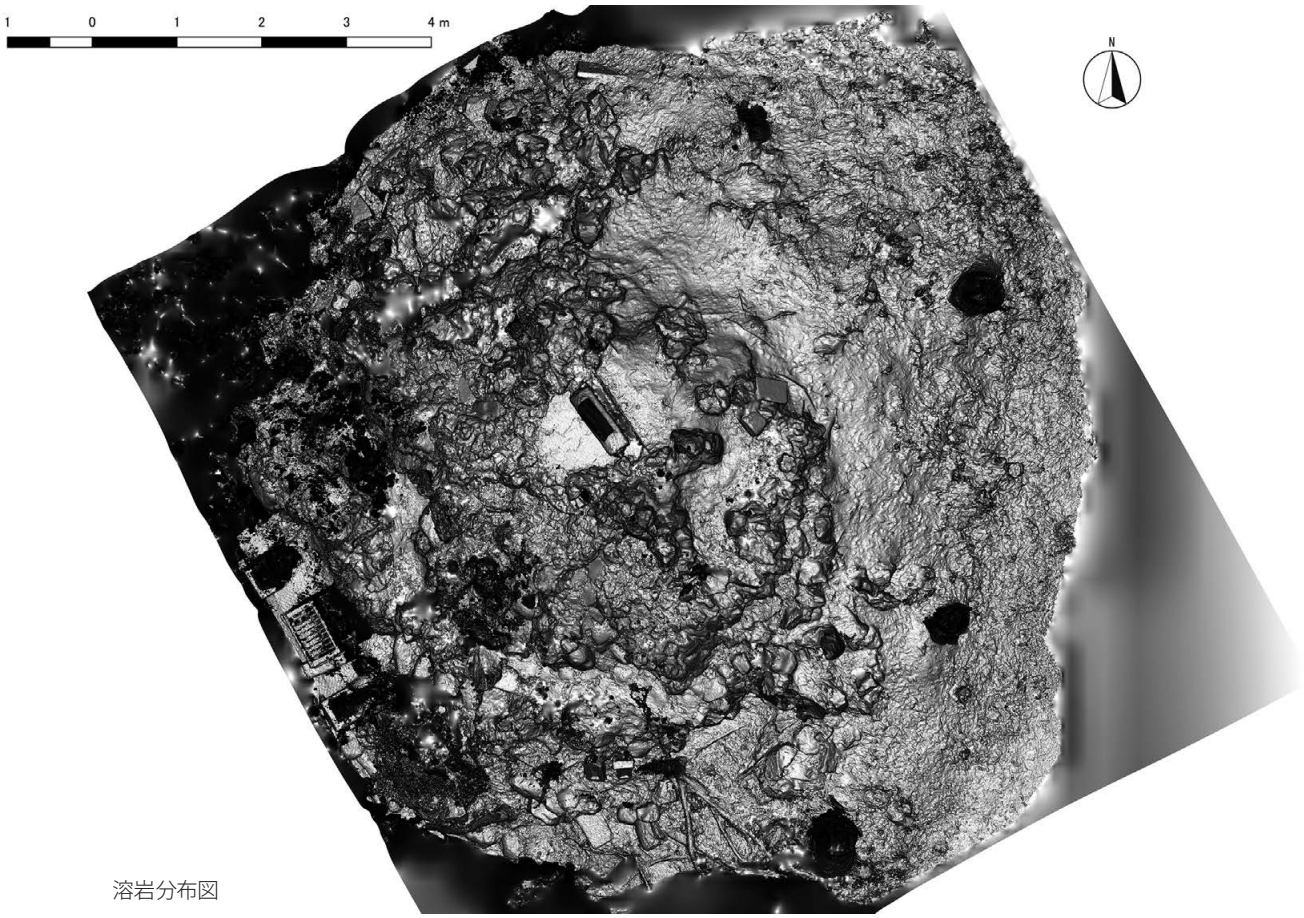
大宮神社浅間塚　1トレンチ（南東から）



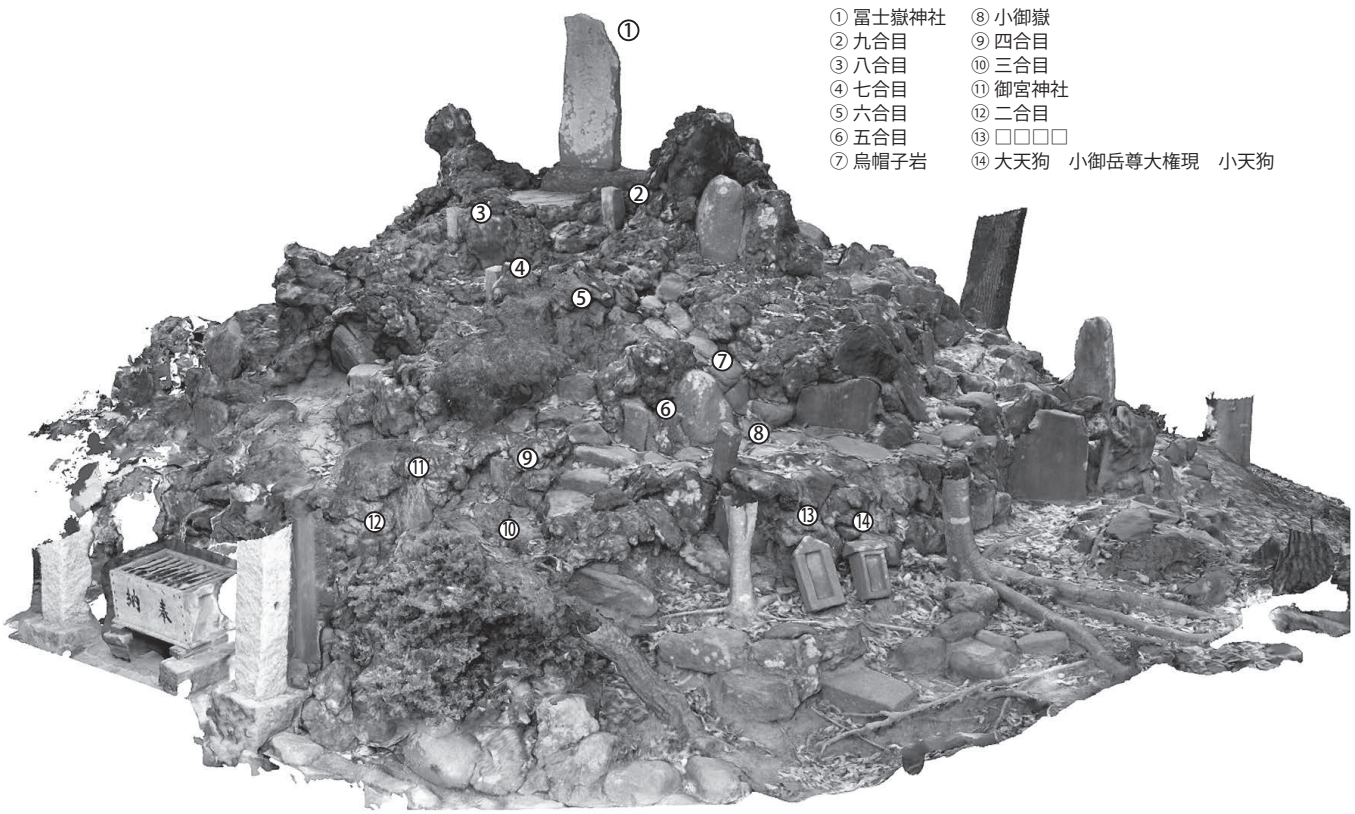
大宮神社浅間塚　1トレンチ遠景（東から）

大宮神社浅間塚　2トレンチ（北東から）

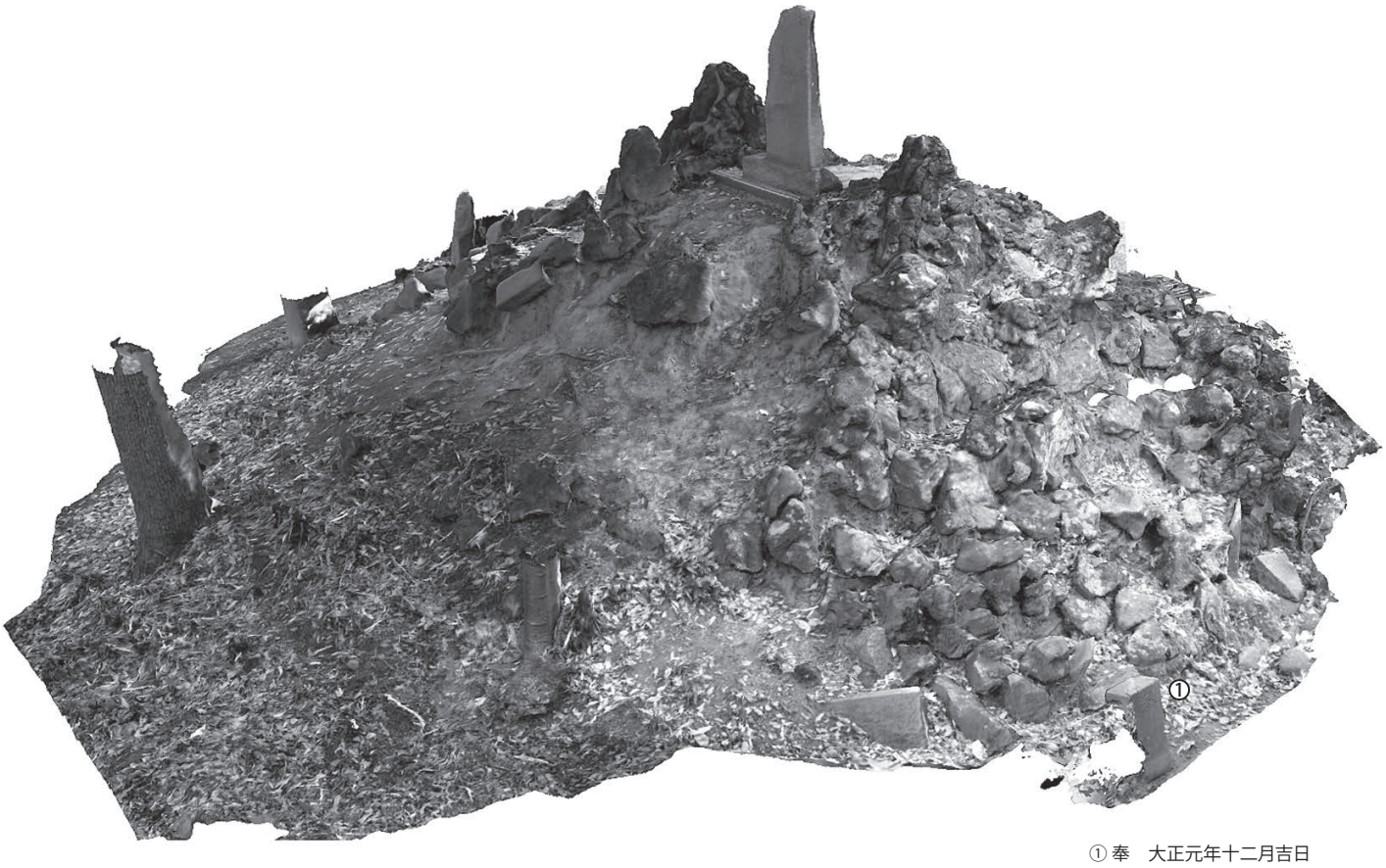
大宮神社浅間塚　調査前



溶岩分布図



石造物分布図（南西から）



石造物分布図（北東から）

南大広遺跡　調査前状況（北東から）

南大広遺跡　4 トレンチ（南から）

南大広遺跡　17 トレンチ（南から）

南大広遺跡　23 トレンチ（南から）

南大広遺跡　作業状況（南西から）

南大広遺跡　68 トレンチ（南から）

南大広遺跡　69 トレンチ（南から）

南大広遺跡　71 トレンチ（南から）

稲荷台遺跡　調査前状況（南東から）

調査前状況（北西から）

稲荷台遺跡　作業状況（北東から）

稲荷台遺跡　1トレンチ（東から）

稲荷台遺跡　11トレンチ（西から）

稲荷台遺跡　12トレンチ（東から）

稲荷台遺跡　13トレンチ（東から）

稲荷台遺跡　14トレンチ（東から）

大宮神社浅間塚

2

4

4

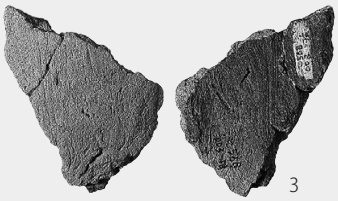
5

5

上椎木遺跡（第4地点）

1

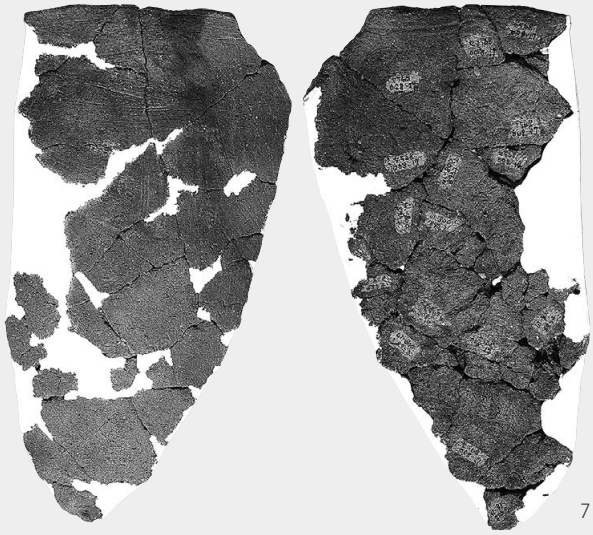
2


3

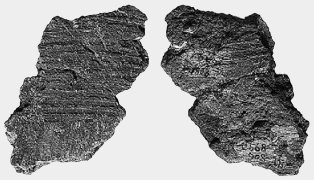
4

5

6

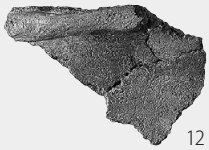

7

8

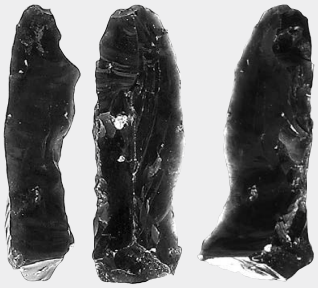

9

10

11

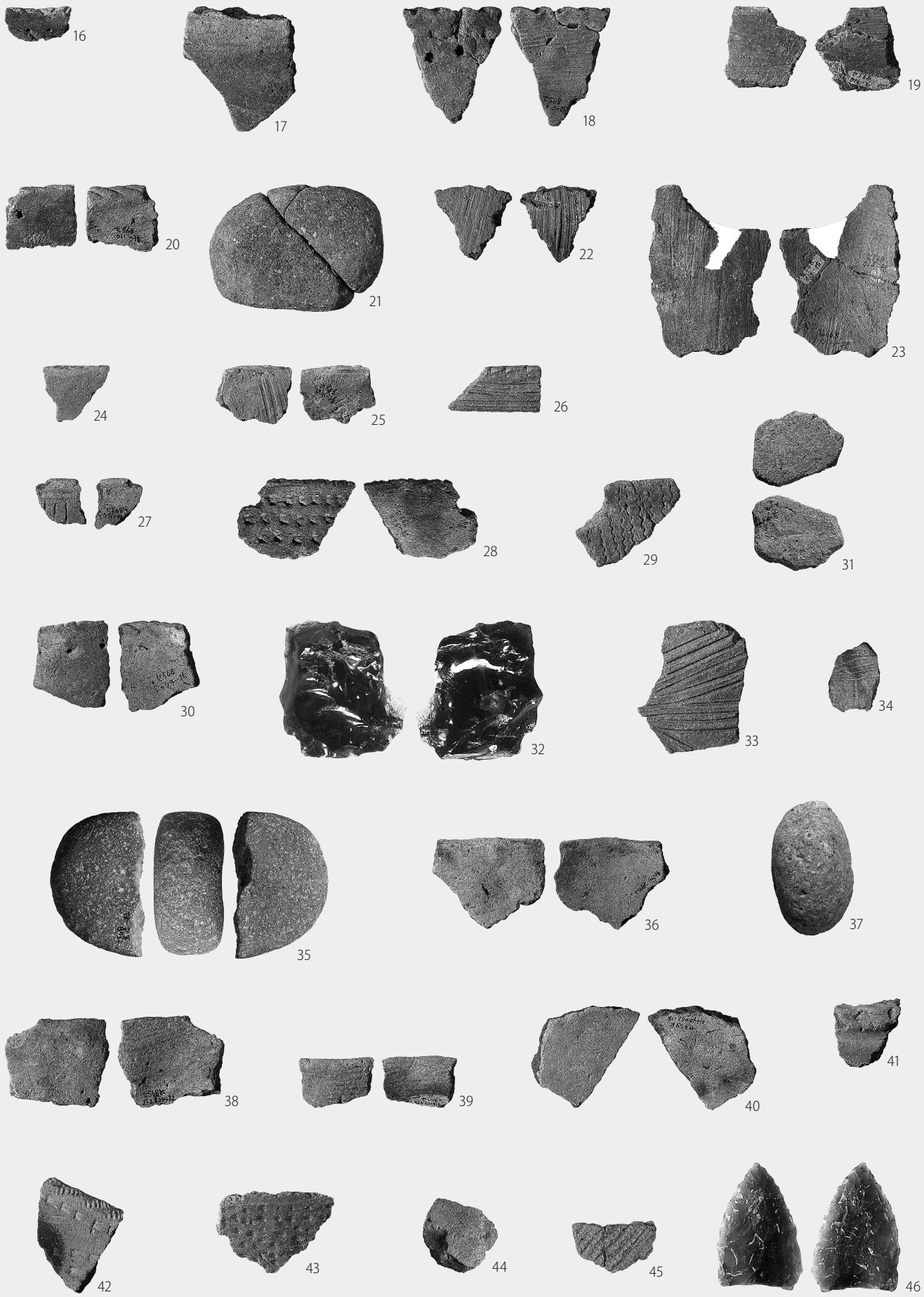

12

13

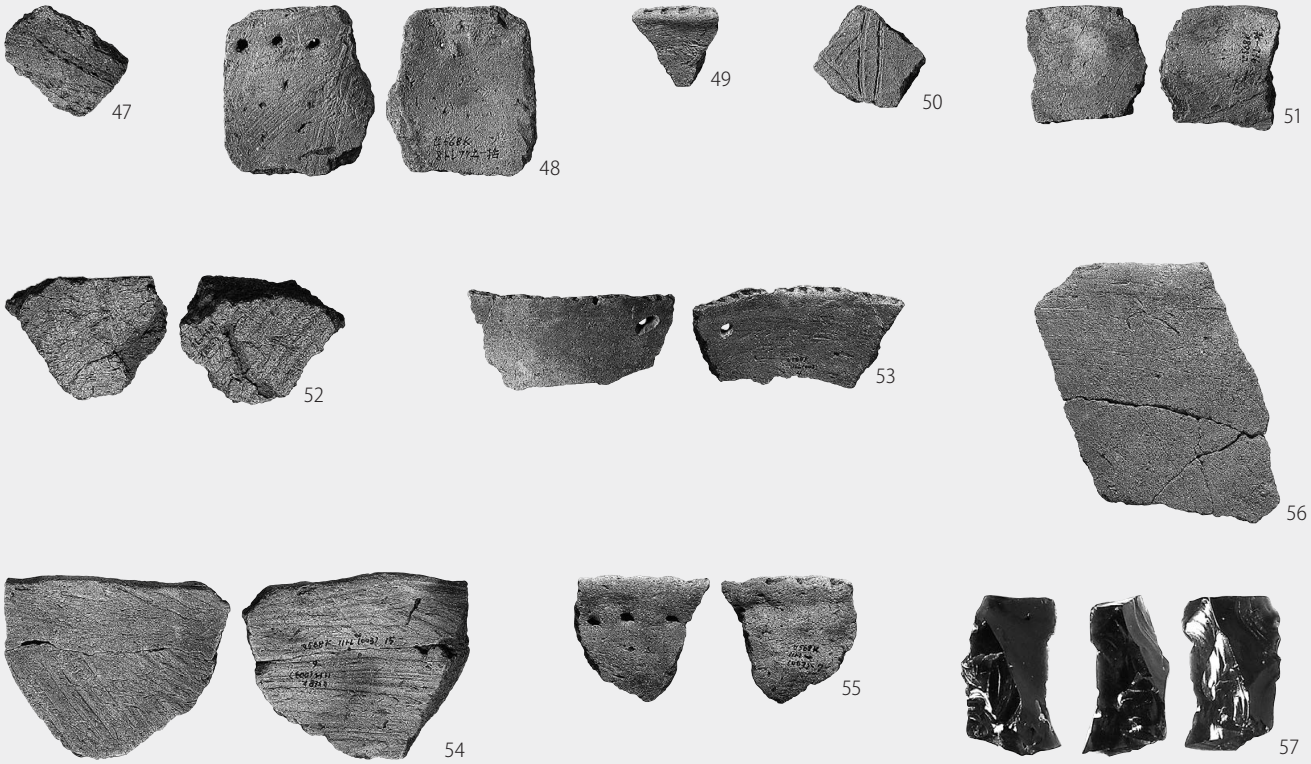

14

15

上椎木遺跡（第4地点）

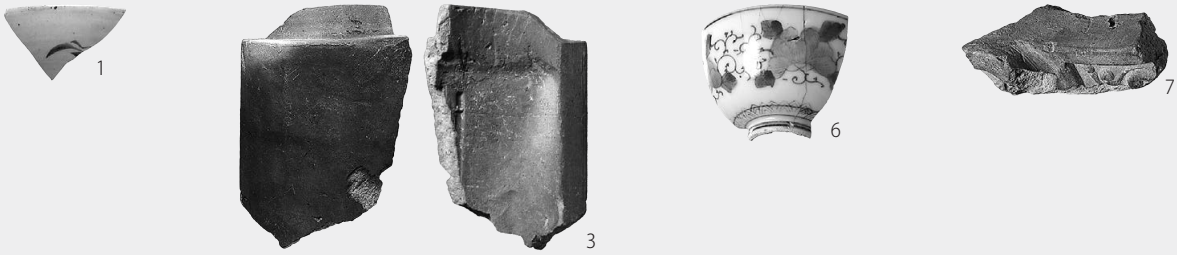

16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
31
30
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46

上椎木遺跡（第4地点）

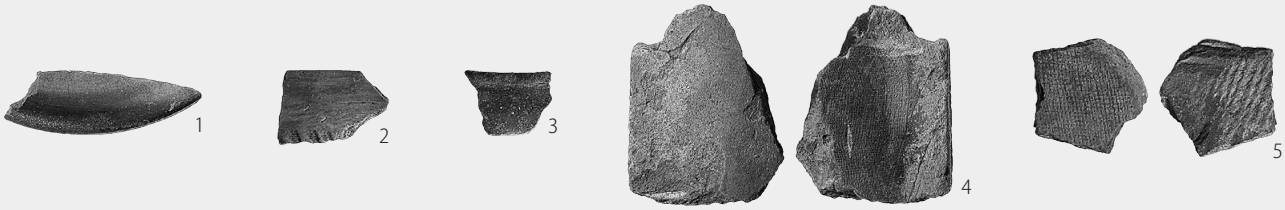


瀬又小滝遺跡（第2地点）

大宮神社浅間塚



稲荷台遺跡（O地点）



報　告　書　抄　録

ふりがな	れいわがんねんどいちはらしないいせきはっくつちょうさほうこく
書　名	令和元年度市原市内遺跡発掘調査報告
副書名	上椎木遺跡（第４地点）、瀬又小滝遺跡（第２地点）、大宮神社浅間塚、南大広遺跡（Ｃ地区）、稲荷台遺跡（Ｏ地点）
巻　次	
シリーズ名	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書
シリーズ番号	第 49 集
編著者名	小川浩一・浅野健太・中野喬介
編集機関	市原市教育委員会（市原市埋蔵文化財調査センター）
所在地	〒 290-0011　千葉県市原市能満 1489 番地　TEL 0436（41）9000
発行年月日	2020 年（令和２年）3 月 13 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
かみしいのぎいせき（だいよんちてん） 上椎木遺跡（第４地点）	ちばけんいちはらししいづあざしいのぎ 千葉県市原市椎津字椎木 2196 番地 17	12219	236	35° 26′ 57″	140° 02′ 12″	20190107 ～ 20190204	69 ㎡ /686.40 ㎡ （確認調査） 208.9 ㎡ （本調査）	個人住宅建設
せまたこだきいせき（だいにちてん） 瀬又小滝遺跡（第２地点）	ちばけんいちはらしせまたくりのきへた 千葉県市原市瀬又栗ノ木辺田 1001 番地 60	12219	962	35° 32′ 23″	140° 03′ 20″	20190201 ～ 20190213	19 ㎡ /191 ㎡ （確認調査） 46.4 ㎡ （本調査）	個人住宅建設
おおみやじんじゃせんげんづか 大宮神社浅間塚	ちばけんいちはらしごい 千葉県市原市五井 1597 番地	12219	698	35° 30′ 45″	140° 04′ 58″	20190415 ～ 20190516	20 ㎡ /197.383 ㎡ （確認調査）	富士塚移設
みなみおおひろいせき（しーちく） 南大広遺跡（Ｃ地区）	ちばけんいちはらしやまきあざみなみおおひろ 千葉県市原市山木字南大広 44 番地１の一部	12219	805	35° 30′ 42″	140° 08′ 51″	20190507 ～ 20190530	889 ㎡ /8,890 ㎡ （確認調査）	戸建専用住宅用地の造成
いなりだいいせき（おーちてん） 稲荷台遺跡（Ｏ地点）	ちばけんいちはらしやまだぼし３ちょうめ 千葉県市原市山田橋３丁目 11 地番 11	12219	792	35° 30′ 22″	140° 07′ 22″	20190910 ～ 20190927	107 ㎡ /1,070 ㎡ （確認調査）	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上椎木遺跡（第４地点）	包蔵地	縄文時代	縄文時代早期炉穴 16 基、縄文時代土坑 14 基、ピット３基	縄文土器・石器	縄文時代早期炉穴群の広がりが確認された。
瀬又小滝遺跡（第２地点）	包蔵地	縄文時代	縄文時代中期土坑５基、縄文時代土坑３基	縄文土器・石器	縄文時代の土坑が確認された。
大宮神社浅間塚	塚	近代	近代塚１基	近世陶磁器・瓦、近代磁器・瓦	調査により、塚の墳丘構築土から近世陶磁器に共伴し近代磁器が出土した。このことから、富士塚の築造年代は明治時代以降と判明した。
南大広遺跡（Ｃ地区）	包蔵地 生産遺跡	古墳時代 奈良・平安時代	縄文時代早期土坑１基、弥生時代後期竪穴建物跡１棟、古墳時代終末期方墳１基、奈良・平安時代方形周溝状遺構１基、竪穴建物跡２棟	弥生土器、奈良・平安時代土師器、須恵器、灰釉陶器、平瓦	調査区南側において、古墳時代終末期の方墳を確認した。
稲荷台遺跡（Ｏ地点）	包蔵地	弥生時代 奈良・平安時代	弥生時代後期竪穴建物跡１棟、奈良・平安時代竪穴建物跡３棟、溝状遺構１条	弥生土器、奈良・平安時代土師器、須恵器、瓦	調査区の西側を中心に弥生時代後期及び奈良・平安時代の竪穴建物跡が確認された。

要　約

今年度は、市内に所在する６遺跡について発掘調査を行い、そのうち３遺跡と昨年度の２遺跡について報告した。上椎木遺跡（第４地点）は、縄文時代早期後半を中心とする炉穴群の広がりが確認された。瀬又小滝遺跡（第２地点）は、縄文時代の土坑が確認された。大宮神社浅間塚は、近世の塚である可能性も考えられたが、明治時代以降の築造と判明した。南大広遺跡（Ｃ地区）は、古墳時代終末期方墳の他、周辺の調査で明らかになった古代寺院跡と関連する遺構群として、奈良・平安時代の竪穴建物跡や方形周溝状遺構の存在が確認された。稲荷台遺跡（Ｏ地点）は、四面廂を持つ掘立柱建物跡群や多量の緑釉陶器が検出されたＥ地区の北方にあたる。官衙関連遺構を維持・管理する成員の集落跡と見られる奈良・平安時代の竪穴建物跡等を確認した。

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第49集

令和元年度 市原市内遺跡発掘調査報告

令和２年３月 13 日　発行

編　　集　　市原市埋蔵文化財調査センター
千葉県市原市能満1489
TEL 0436（41）9000

発　　行　　市原市教育委員会
千葉県市原市国分寺台中央1−1−1
TEL 0436（22）1111

印　　刷　　三陽メディア株式会社
千葉県市原市五井東3−47−10
TEL 0436（22）4348